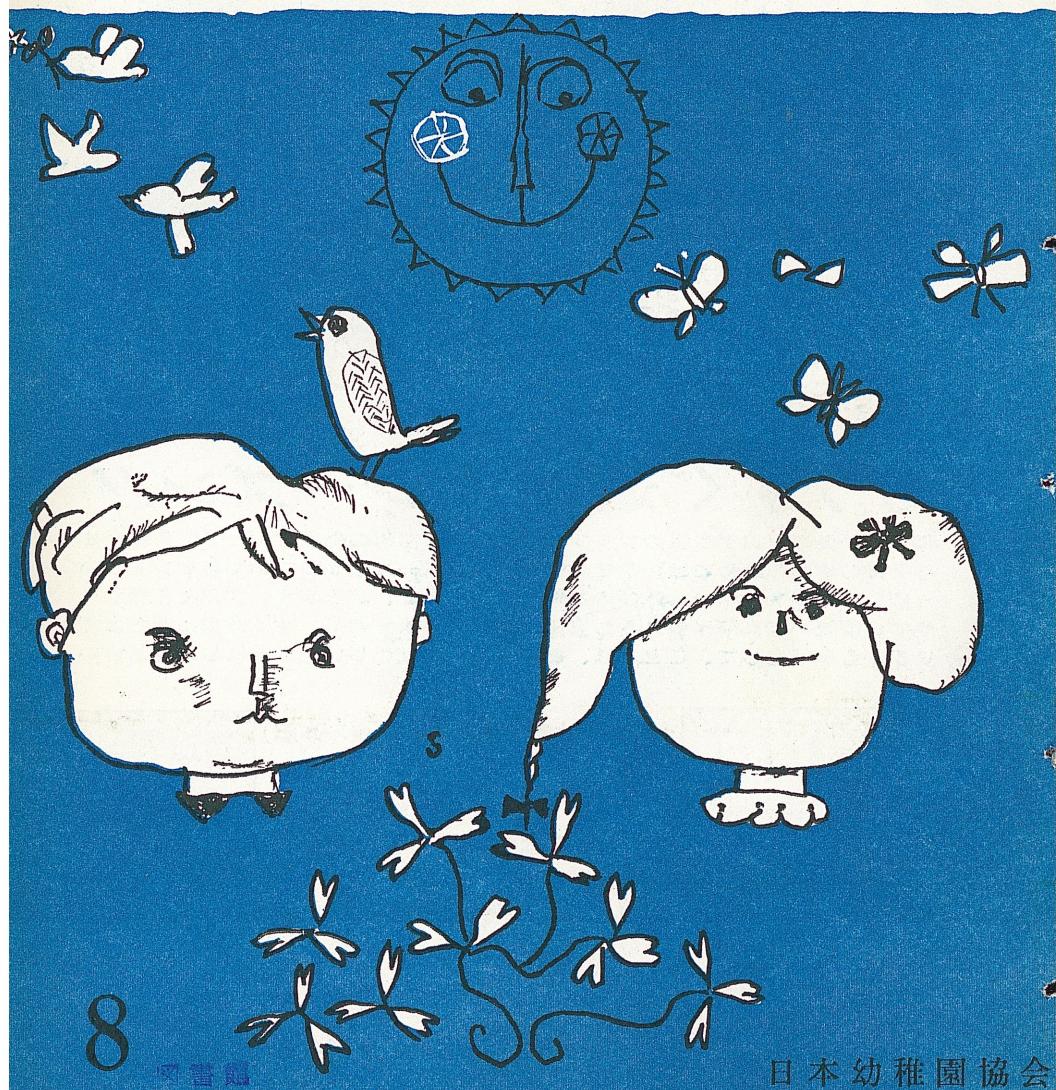
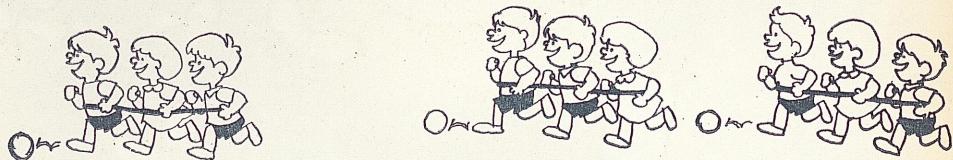
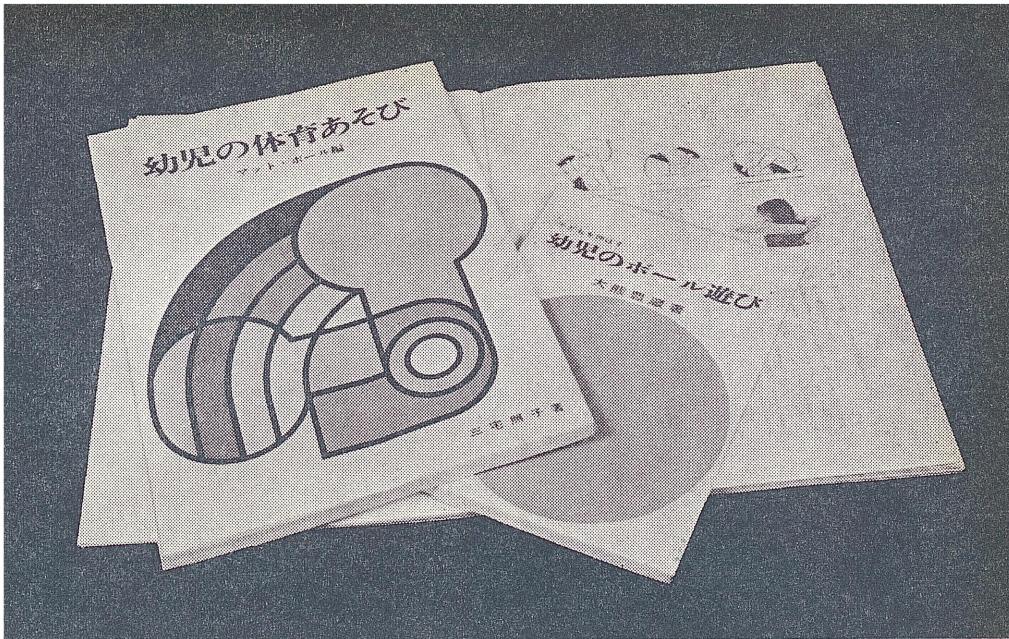


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

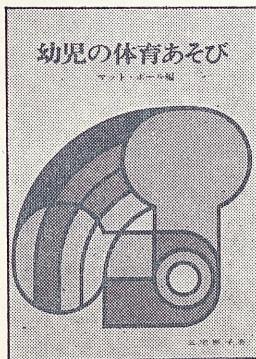
第六十九卷 第八号





もうすぐ運動会シーズン!!

毎年運動会のプログラムのプランニングにはお悩みの先生方、ここにご紹介する2冊の本は運動会には欠かせないマットとボール遊びについてのヒントがいっぱい。マット・ボール遊びの基礎から応用まで、読みやすい文体と、わかりやすい解説・写真やイラストも豊富に入っていますので、すぐお役にたちます。いまから準備をして、ことしは、おもいっきりたのしい運動会にしてください。



幼児の体育あそび(マット・ボール編)

三宅照子著

B5判 120頁 550円 〒70

子どもを伸ばす幼児のボール遊び

大熊豊蔵著

B6判 118頁 250円 〒50



株式会社 フレーベル館

幼児の教育 目 次

—第六十九卷 八月号—

表紙 鈴木義治

- 世界の幼児教育の根本的課題 庄司雅子(2)
幼児教育への願い 長山篤子(6)
幼稚園における指導のいろいろ 服部縫子(12)

- 手先の動きと子どもの感情(4) 清水エミ子(18)
子どもの発案によるあそび(2) 田中都慈子(26)

- ★ヨーロッパの旅(5) 平井信義(31)
サンド・プレイ・テクニック(箱庭療法)について(4) 秋山達子(36)

- 幼稚園のある一日—四月 内田和子(46)

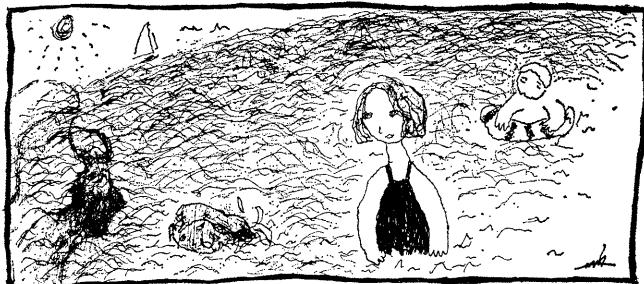
- 書評・幼稚園教育九十年史 多田鉄雄(56)

- 愛珠・想い出するままに(2) 中村道子(58)

- 洋書紹介 (55)

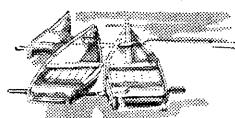
- 幼稚園の生活 (68)

- いきいきしき (72)



世界の児童教育の根本的課題

莊 司 雅 子



西欧、東欧、アメリカを旅行するたびに、私は行く先々で必ず幼稚園や保育所を訪ねたり、家庭での子どもの生活を見たりする。私が見た保育所と幼稚園で、特に記憶し、記録しているものは以下のところである。

まず、デンマークのコペンハーゲンにある市立の児童福祉施設の一つとしてのナースリ・スクール、ノルウェイのオスロにある市立の全日保育所とそれに隣接した幼稚園、スエーデンのストックホルムにあるナースリ・スクールとブレイ・スクール（幼稚園、東ドイツでは東ベルリンの国立キンダーガルテンとオーベルワイスバハにあるフレーベルの誕生の家のキンダーガルテン及び世界の幼稚園の発祥地ブランケンブルグのフレーベル・キンダガルテン、チェコスロバキアではプラハにある国立の母親学校のこと）、オランダのライデンにある小学校と別校舎になつてゐるインファント・スクール、ベルギーのブリュッセルにあるキャソリックの幼稚園、パリのエコール・マテルネ（母親学校）、イギリスのスコットランドのグラスゴーにあるキャソリック系のインファンティ・スクール、ロンドンの郊外にある公立のインファンティ・スクール、今年訪問したロード・アイラント州のプロビデンスにある州立大学の実験学校及びその近郊の公立・私立の幼稚園、更に帰途サンフラン

ンシスコの郊外にあるスタンフォード大学の附属ナースリ・スクール及び小学校にある幼稚園などである。アジア地域では数年前にマニラ大学教育学部の附属幼稚園を訪問した。

以上の幼稚教育施設を、私は一九五一年・一九六一年・一九六年・一九六五年および一九七〇年の数回の海外旅行中に訪問したるものである。これらの幼稚教育を大きく、資本主義社会の幼稚教育、社会主義社会の幼稚教育とに大別できるが、資本主義社会の幼稚教育を更に大まかに分けると、制度上からいえば、イギリス型の義務教育制度に組まれている英米を代表とする一年保育の幼稚園がある。ここでは、五歳以下は基本的には家庭で母親が保育すべき考え方である。母親が働く場合はやむを得ず、全日保育所にあずける。幼稚園は純粹に教育事業であって、教師と教生とが一日二時間程度に幼児の能力を伸ばし、生活態度を指導する。次には、フランス型の母親学校のように、社会事業と教育事業という二つの使命をもち、すべて無償であり、園長と教師の給料は国から支給され、保母は自治体から給与を受け、教師の出勤前、休憩中、放課後などの時間に教師の代りをする。もちろんこの二種の職員はその必要性が認められるところにのみ置かれている。校長や教師、保母の他にももちろん部屋の整理や幼児の用具の世話をする職員や、給食係など、校長の任命によって従事している。このように、フランス型の幼稚教育は母親学校という名称の

もとに、幼稚園と保育所の二重の性格をそなえ行なわれている。そして義務ではないから自由ではあるが、設立にさいしては国家や地方自治団体の財政的な管理統制がゆきどき充実している。この種の型の幼稚教育制度が方々にとり入れられている。

次は北欧型であるが、社会保障制度の歴史の古いこれらの諸国の幼稚教育施設は、国営であろうと個人経営であろうと、いずれも国や地方自治体から財政的援助を受けている。保育所、幼稚園だけでなく、児童遊園地なども児童福祉施設の一環として設備されている。これは、特に豊かな国であるスエーデンにおいて立派な設備が施設の内外によく行なわれている。設備だけでなく、人間的条件にもすぐれている。たとえば、ストックホルムの公立ナースリ・スクールを見ると、三ヵ月から一二ヵ月、一歳から二歳までの乳幼児グループは一人の保母につき六人、二歳から三歳までは一二人、三歳から五歳までは一五人、それに実習生が手伝い、部屋の整理の職員、炊事婦、医者、看護婦がつく。一つの保育所の規模は、三〇人、四三人、五四人といった小規模のものである。幼稚園は一日約二時間から三時間で、特別の訓練を受けた教師が指導する。一人に幼児二〇名、午前二〇名、午後二〇名と二つに分けて保育する。必ず実習生が手伝いに来る。

西ドイツは保育所、幼稚園の区別なく、いずれもキンダーガルテンと呼んでいる。そして伝統的には幼児教育は教育された母親親

がやることになっている。母親がいない時のみキンダーガルテンに行かせる。そして管轄は日本でいえば厚生省になる。戦後のドイツでは、ほとんどの母親が働いているので、たいていの児童は朝六時から午後六時までキンデルガルテンに入れられるようになっている。もちろん母親の働く時間によって、午前中で帰る子どももいる。更にドイツでの特色か、それとも幼児教育の遅れからできたものともいえるものに、シャーレ・キンダーガルテンの制度がある。ドイツではアメリカのように、幼稚園と小学校が連続している。イギリスのように、義務教育でもない、また北欧のように幼児教育施設に恵まれていない、しかも、すべての児童は満六歳になると小学校へ入学（四月）のテストを受けなければならぬ。このうち、身体的に虚弱なもの、病気をもつてゐるもの、知能の遅れているものは、小学校に附属してあるシャーレ・キンダーガルテン（小学校幼稚園）に入れられる。もちろんこの時から義務教育期間にかぞえられる。そして心身ともに健全になり、普通の学級に入れるまで、このシャーレ・キンダーガルテンで教育されるわけである。

これが革命後は婦人の働く権利と義務が憲法にうたわれているから、この婦人の労働を保証するための施設として、保育所、幼稚園が国家の力によつて大々的に拡充された。家の外で仕事をする婦人労働者の子どもは無条件で保育所や幼稚園に入る。戦後社会主義に移った東欧諸国は、いずれもこのような幼児教育施設が完備されている。私が訪問したプラハの母親学校を見ると、母親の働く時間（六時間）だけ子どもが来ている。その教師や保母も六時間勤務であるから交代制になり、母親学校は一日中開校している。国立であるから、人的条件は資本主義諸国の場合と全くないところである。

以上制度面からみたが、次に教育の内容方法の面からみてみると、世界の幼児教育はフレーベル型かモンテッソリ型、更にはその両者をとり入れてある中間型が見られる。大まかに見て、プロテスタント系（新教）の幼児教育はフレーベル型、キヤソリック系（旧教）の幼児教育はモンテッソリ型である。もっと大胆にしてしまえば、ラテン系はモンテッソリ、アングロサクソンやゲルマン系、スラブ系はだいたいフレーベル型をとっている。

次に、社会主义諸国の幼児教育施設は、一言にいって働く婦人のために用意されたものである。革命前のロシアなどは、上流階級の少數の子どものためにフレーベル幼稚園が開設されていた。その他若干の労働者階級のための託児所があつただけである。と

私の見た範囲内では、フレーベルの保育所や幼稚園は幼児にもっと多くの創造の自由を与えていた。モンテッソリのは決められた範囲内での創造の自由のみがあたえられている。フレーベル型の教師は幼児の無限の能力を伸ばさんと願い、モンテッソリ

型の教師は一定のわくに幼児をはめたがる。フレーベル型の教師は幼児の行儀に寛大であり、モンテッソリ型の教師は幼児の行儀をきびしくしつける。フレーベル型の教師は幼児のために環境を用意して幼児自らに学習させ、モンテッソリ型の教師はいかに幼児を教えればよいかに苦心する。フレーベル型の教師はあまり幼児を教えない。モンテッソリ型の教師はよく幼児を教える。フレーベル型の幼児は活動的であるが、モンテッソリ型の幼児は物静かである。フレーベル型の幼児の作品は変化に富んでいるが、モンテッソリ型の幼児の作品はやや型にはまつたものが多い。フレーベル型の幼児は創造的であり、モンテッソリ型の幼児は模倣的である。

以上、世界の幼児教育を見て感じたことを述べたに過ぎない。ところで制度を異にし、方法を別にしても、そこには共通の問題がみられる。それはやがて二十一世紀を動かしていくべき今日の幼児のための教育のあり方に関する問題である。今日の幼児は二〇年前の幼児よりもっと多くのことを知っている。またもつと多く知ろうとしている。しかし幼児は何を知ることができるのかまた何を知るべきかについては、われわれ教育者は必ずしも十分に知っているとはいえない。私どもはややもすればおとなとの規準で幼児の活動を理解したり、知るべき内容を決めようとしたりしてはいないだろうか。幼児の製作や描画や積木遊び、ごっこ遊び

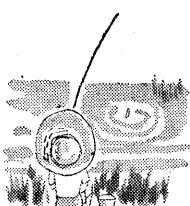
の中に、幼児は知っている多くのことを表わしており、更にそれ以上のことを知ろうと求めている。したがってわれわれはこれらの幼児の発達を導かなければならない。つまり幼児の先頭に立つて彼らを指導しなければならない。

しかしその前にわれわれはまず幼児を理解し幼児と共に歩むことを探さなければならない。こうすることによって幼児をして幼児の世界に十分に生活させ、活動させることができる。

このように幼児について生きることと、幼児の先頭に立つて幼児を導くこととの二重の仕事が世界の幼児教育者に共通に課せられている課題であると思う。そしてこの共通の課題の解決のために世界各国の幼児教育者は共通の努力をはらっているということができる。言葉をかえていうならば、いかなる制度のもとに、いかなる施設や設備で、またいかなる内容と方法とで、独立せる一人の人格としてのすべての幼児を、一人残らず幼児らしく生活させることができるか、という根本的課題が世界中の幼児教育関係者に課せられている。そしてこの課題解決を疎外しているものは何か、それからの解放をいかにすればよいか、つまり貧困にあえぎ、文化文明に恵まれない環境の幼児をどうすればよいか、また逆に科学技術の高度の進歩のために、幼児の本来の発達が疎外されている点をどうすればよいか、これらのことなど、世界のすべての幼児教育者に解決をせまられている問題であると思う。

幼児教育への願い

長山篤子



現代における幼児教育の課題ということが今回の題ですが、

今年度より主婦の座にある私にとって、現代における幼児教育の課題というには、あまりにも社会の緊迫した場面や、研究の場、幼児や教師との出会いの場から離れ過ぎてしまつたように思ひ、現在の私の立場から、幼児教育界に対する私の願いを記してみることにいたしました。

一般的に教育の課題といいますと、人間形成ということになると思います。幼児教育の場合も同じだと思いますが、幼児教育の場合は、人間形成の初期をどう体験するかということにあります。人間形成の初期をどう体験するかということ大その後の人間形成に大変かかわりのあることであり、教育の大

きな課題とされているところだと思います。

そこで人間初期の、ことに幼児の体験に対しては、世界的に関心が示されており、私も同じく、多いに、関心を持つています。科学の発達、進歩に伴い、早教育がさけばれ、日本においては、就学年齢を下げるとか、世界においても幼児教育における考え方を変えるとか、カリキュラムを組むとか、その扱い方の検討をするとか、さまざま問題が投げかけられ、幼児教育が世界的に注視されてまいりました。私どももあらためて、日本の幼児教育界を見直さなければなりません。

私は現在、都会の生活から離れ、北国の田舎の生活をするようになります。あらためて、幼児教育というものについて考えさせ

られています。以前に経験した多くの問題とともに少し整理し

たいと思います。まず子どもの生活に対する子どもの考え方の検討、私の現在の疑問と、そして願いとに分けてみました。そのことによって人間初期の体験ということを考えてみたいと思います。

★ 子どもの生活

「自然の中での子ども」

私は今まで自然の中で生活している子どもの生活についてどんなに生き生きとしているかということは、書物で読んだり、また聞いたりしてきましたが、直接にそういういた場面に触れることがありませんでした。都会で生活した自然は、ほんのわずかな自然を相手にした生活でした。フレーベルが、「人の教育」の中でのようなことをいつていることに感動していました。

「春は、新芽を生じ、枝を出し、花咲いて、人々の心を、已に子どもの心までを歡樂と生命とで充し、人々の血潮は躍り、心臓は高鳴る。秋は……子どもの心までが希望と憧憬とに充ち満る。どつしりした冬は、人々に勇気と活氣を喚び起し、勇氣、活力、堅忍、奮發などのこの感情は子どもの情思を快活に

広げて行く……」と。

しかし、実感としてこのような経験をしたことがありませんでしたが、今、自然の中で生活している子どもの姿というのに感動し、あらためてフレーベルの言葉をかみしめています。自然の力と自分の力をとぶつけ合いながら生活し成長していくということは、どんなに、幼児の初期に体験しても、体験しうるということはないように思います。子どもたちの生活の歩調は、何の抵抗もなく、自然の歩みと一致しているようです。自然の中で、生活する子どもの姿というものをあらためて見直さなければなりません。

私が住んでいる隣に八十六歳になられるおばあさんがいらして、こんな話をきかせて下さいました。「私は、子どもは自然の中で放つようにして育ててきました。大きなこの池のまわりは、昔はみんなリンゴ園でしたが（現在はほとんど住宅）そこにはニワトリやヤギやアヒル、ブタなどを放し飼いにしていました。アヒルが、子どもをつれて毎日散歩する散歩道ができるになりました。アヒルが、そこを歩いて散歩し、リンゴ園で放し飼いにしているニワトリがいつのまにかヒヨコを連れて散歩し、子どもたちがそのニワトリやブタといっしょにはいざりまわって遊

んでいたのですよ。部屋の中の襖はみんなトンネル、または、はずし、おままでコナーになつていきました。子どもたちはそこで、いろいろなことを体験していきました。考える子どもはちゃんとと考えた。あれしてはいけない、これしてはいけないとはいわなかつたよ。あれしたいという子どもにはそうさせてみた。これしたいという子どもには、思うようにさせてみた。自然がちゃんと相手になつた」という話をうかがい大変感激いたしました。今ではそうして育つた十数名のお子様方が立派に社会的な活動をなさつていらっしゃいます。

北国にきて、日本の風土、土壤は素晴らしいとあらためて感じています。そして、日本の子どもたちは、こんな四季変化のある素晴らしい生活をすることが出来たのかと思つています。自然の中に放たれた子どもは生き生きとしています。四歳の私の娘が幼稚園の帰り道、つくしどりやタンボボとりに夢中になり、あるいは、いつまでもすわりこんでタンボボに見入っている姿をみかけます。そして「タンボボってやさしいね」「どうして」「だつて、いつまでもじーとしてちょうどちゃんど、とまらせてあげているんだもの」「ちょうどうな」と嘆息をつきながら語る言葉を聞き、あわただしい都市での生

活が、子どもの生活をいかに不自然にしていたかを思い知られます。一歳三ヶ月になる息子は毎日毎日飽きもせず両手に石をもつて川に幾度も幾度も投げに行きます。ボチャンという音に身を躍らせ喜び、次に流れる水のようすに見入っています。おとの干涉の多くなつた今日、「自然がちゃんと相手になつて物事を解決してくれた」ということばには、本当に考えさせられてしまいます。

自然の中での子どもの生活がすべてとは思いません。子どもの生活経験は、果てしなく広がっていきます。

粘土と子ども、製作の好きな子ども

昨年は幼稚園で粘土の遊びをよくいたしました。ドロンコいじりは子どもたちの大好きな遊びです。大きなドロ粘土のかたまりを両手で、こねたり、板にたきつけたり、机の上に山と積んで頭の先から足の先まで粘土だけにして粘土と夢中に取り組んでいる姿は全く壯快で、熱中している子どもの意気を、そばにいても感じさせられます。一年間の記録をみてみますと、粘土の大きな山を用意しておくだけで、その遊びの発展は、八十数種類にもなつています。お店やさん、宇宙ごっこ、海になり山になり、動物園になり、怪獣になり、乗物ごっこに

なり、自分たちの生活経験をいろいろな形で表現していくます。私は、粘土（ドロ粘土で油粘土などはあまり良いと思わない）は、子どもたちの生活にとって切り離せない大変によい遊び道具だと思っています。

また製作活動も子どもから切り離すことのできない遊びだと思います。生まれおちてきた子どもは、みんな作る喜びをもち合わせているのではないかと思うくらいです。何かのきっかけで、それが阻害されていない限り、子どもたちは作ることが大好きです。大小の空箱を積み重ね、あれにしてみようか、これにしてみようかと考え、船になつたり、素晴らしいマイホームになつたり、望遠鏡になり、トランジスターになり、金庫、ハンドバッグ、カメラと、百をこえる種類のものを創り出していきます。

ヤクルトのビンが、今日は懐中電燈に、今日は顯微鏡に、また望遠鏡にいろいろと変化していきます。それに取り組んでいる楽しそうな喜々とした子どもの目は私たちにまで喜びを分けてくれます。

私は以前子どものこうした製作活動だけで、（自らが空箱やその他おとの生活の廃品となっているものを利用して遊びと

して製作活動したもの）一体どのくらいの遊具を自分たちで創り出しているだろうかと記録してみたことがあります。半年の記録で七十種類のものを創り出していました。もちろん数だけではなく、その一つ一つは実によく考え出され、おとなが作る遊具よりずっとおもしろいものばかりでした。驚きをもつて、この種類を他の方に紹介しましたら、何の感動も示されませんでしたので（将来幼稚園の先生になろうとされる方）がつかりましたことがあります。

私は、今『自然の中の子ども』、『粘土、製作をする子ども』の姿を私の知る限り少しばかり記してみましたが、子どもの活動は、おとなが制限しまた阻害しない限り、果てしなく広がって行くように思います。「『子どもってこんなにたくさん活動を自らの力でして行くのね』と語りかけても、その意味、意義を感じられなくなっています。それよりも、おとの文化を子どもになんとか、植えつけようとする努力の方に重点がおかれてしまうわけです。子どもの生活力を私どもはもう少し信じられないものでしょうか。子どもの生活を知る努力がもう少し、はらわれてもよいのではないでしょうか。

★ 疑問

さて、一般的に子どもの生活に対する私どもの考え方の検討と、いうことを少しづかち記しましたが、次に、すべての幼稚教育機関が、子どものこうした生活欲に応えているかどうかということが大変な疑問です。

世の中一般の父兄の幼稚園に対する要求に応えるためには、現代は、まず何かを子どもに教えなければならぬといった児童教育機関の態度に対し、私たちはどのように考えたらよいのでしょうか。親（私も含めて）、特に母親といふものは大変勝手なもので、子どもが自ら成長する力というものに対し、本能的に近いくらい抵抗を感じているのではないでしようか。「自分で成長していく」ということが信じられないから、絶えず何かを教えなければならないとあせる。特に文化の中に生活しています。

★ ねがい

疑問とともに、また、児童教育に対する願いがあります。
・児童とともに生活していますと、子どもの生活とか気持ちは、ともに生活してみなければ、本当にわかりません。私たちが何を用意し、どのように環境を整えたらいかなどということは、生活をともにしてから考えられます。例えば、粘土につい

ては安心します。絵を描くことに喜びをもつている子どもの姿よりも、出来上がった絵をみてよく描けていると思えば安心します。ヤクルトのビンがさんざんいじくられ、やつとの思いで、顕微鏡になつたものをみて、なんだこんなものを作つてきて、幼稚園では何も教えないのかと不平をいいます。こうした父兄の要求に絶えず耳を傾けてしまつた、また傾けなければならないといった幼稚園の現状を私どもはどう考えたらよいのでしょうか。親の要求に応えるのではなく、子どもの生活欲に応え得る幼稚園になれないのはどこに原因しているのだろうかと疑問です。教師自身の認識不足、経営に対する問題、はては、國の方針に対する誤りなど、さまざま問題が思ひあたります。

ても、その扱い方、性格、子どもの反応などは、絶えず変わっています。集計だけで、また観察だけで（もちろんそれも大変必要とは思いますが）書物を書きがちな現在、なんとか、子どもと生活をともにした上で本が出来上がらないものかと願います。大変忙しい時代ですが、特に幼稚教育者養成機関で教鞭をとられる先生方に、望みたいと思います。

・私は恵まれた自然の中にきて、初めて、自然の中での子どもの生活を知ることが出来たのですが、都会では大変経験しがたいことです。都会だけでなく、田舎でさえも、テレビにのつてくる文化生活に憧れ、自然の中にはいることをわすれ、文化だけを受け入れようとする傾向があることも確かです。日本の風土の中には、幼児教育に今一度関心をもちたいものです。日本の風土を知らないくて、これから日本の幼児教育のあり方ということは考えられないと思います。そこで幼稚園の先生が実際に日本の風土の中で自然を中心とした生活をする経験が出来ないものでしょうか。観光で訪れるごとに、間違った方向に進まないよう願っています。私の住んでいる近くに八甲田という開拓地があり、そこで農作業をしている青年の方の話を聞き、今更ながら、自分が自然を相手に真剣に生きたことのなかつたことを恥かしく思いました。

した。一ヵ月でも二ヵ月でも幼稚園の先生が、そんな生活の中に入りこんで生活してみれば、広い視野で子どもを見ることが出来るのではないかと思っています。

・次に、文部省の報告ではなく、幼稚教育をしているものが、現在ある表面的な報告ではなく、幼稚教育の実態と現状というものを全国的に捉えてみなくてはいけないと思います。出来ましたら幼稚教育雑誌を扱っていらっしゃる方々にお願い出来ないものでしょうか。東京にいましても、お隣の幼稚園とは全く異った子どもの見方をし、ばらばらな扱い方をしています。また、どうしているかさえ知りません。

簡単でまとまりがありますが、現在の私なりの考え方を、子どもの生活を知ることから、ぎもんへそして願いとして記してみました。幼稚教育が、教師と学者と母親たちによって、日本で検討されていきますとき、間違った方向に進まないよう願つてやみません。自分の幼稚園のあり方を真剣に今一度問い合わせてやみません。までの習慣にとらわれることなく、誤りを正しくみつめる機会を一人一人が捉えたいと思います。

教育的なチームワークのもとに、感情にとらわれることなく検討することが出来たらどんなによいかと思います。

幼稚園における指導のいろいろ

服 部 縫 子



私は職務上、いろいろな先生方のいろいろな保育を見せてもらつてるので、それらの中で特にすぐれた指導の実際を領域ごとに、その計画や内容、指導の過程などくわしく紹介することが題目にふさわしいのかもしれないが、それはともすれば末梢的な指導の方法や技術のように受けとられそうで気が進まない。

原稿を依頼してこられた側の意図をたしかめればよいとは思ひながら、もしかりに領域の指導の内容や方法についてくわしく書いてくれといわれでもしたら、あいにく私にはそのような資料の持ちあわせもないし、それを書いてみようという気持にもなれないでの、あらためてたずねもせず、ひとりで「指導のいろいろ」という題目をひねくりまわしてみた。

今、幼稚園の現場では、子どもの実態や園の実状をふまえて、

年次別の指導課程や指導計画の研究が進んでいるが、また一方では「幼稚園においては指導をどのように考えればよいか」「幼稚園における指導とは何か」といったところが問題にされている。教育課程や指導計画の作成によって、子どもの経験や活動の内容が豊富になり、日々の指導計画が充実されたとしても、これはあくまで教師の側の計画であって、これを子どもにいかに経験させるかというところに、幼稚園教育のたいせつさがあり、この子どもの経験の場にこそ指導があるのだと思う。

今、私に与えられた指導のいろいろという題目も、実際の保育のいろいろな場で、ひとりひとりの子どもが、主体的な経験を通して成長していくその過程において、教師がその子の成長にどんな役割を果たしているか、その役割のいろいろを考え、またどん

な援助の仕方が有効なのであるかを考えてみるところに「指導のいろいろ」という意味があるという立場からこの稿を進めてみたい。

一、教師と子どものかかわりあり

五月のよく晴れた日、N先生のクラスの子どもたちが園庭で自由に遊んでいた。

O君は砂場のまん中でひとりで大きな穴を掘っている。周囲には同じように穴を掘っている子や、山を作っている子がいたが、彼はそれにはかかわりなく自分の遊びに熱中していた。掘った穴

がかなり大きくなると、体をその中に入れて、まわりの土を無心に掘り続けている。

彼がいっしょにけんめい力を入れて掘っている姿を見ていると、彼の穴掘りには何かの意味があるよう思える。だが穴が相

当大きくなつた頃、力が尽きたのか、この遊びにあきたのか、ふらりと立ち上がり砂場の隅へ行って、また新しい穴を掘ろうとしたその時、N先生が近づいて来て、「O君、何してるの。落し穴できた」とたずねられた。そのとたん、O君の顔は急にいきいきと輝き、ここにこして、さつきの穴へ勢いよくぼんと飛び込んだ。N先生はそれを見ると、さも嬉しそうに、「できた、できた」といわれた。するとO君はさつきよりももっといそいそと、

周囲の砂を掘りだしたのだ。

「落し穴できた」という先生の声を聞いたO君が、全身で喜びを表現して勢いよく穴へ飛び込んだ気持を、先生はたった二言の「できた、できた」という短いことばで受け止めた。私はそれを見て、何とすばらしいなと思った。

これはその時のO君の喜びをそのまま感じられたN先生だからこそいえることばだと思い、O君の喜びを共によろこぶ先生の気持ちが、短いこのことばを通してO君に伝わったれど、彼はまたいきいきと遊びに取り組んでいったのだろう。

N先生は今度はすべり台の方へ近づいていった。そこにはおおぜいの子が群がつて遊んでいた。特に元気な男の子は二、三人つながつてすべつたり、下から登つて来て、途中からすべりおりたりしていた。

そんな中に、ジャングルジムの枠をよちよち登つて、皆の後からやつとすべり始めたA子がいた。A子はまだ幼稚園の生活に慣れないのか元気がなかつた。N先生はA子の姿を見つけると「A子ちゃん、すべつてみせて」といった。A子が友だちを避けながら、やつとすべり台の上にたどりついた時、先生は「A子ちゃんがすべらはるえ。A子ちゃんがすべらはるえ」といわれた。その声を聞くと今まですべり台の上にかたまっていた男の子も、下か

ら登つてこようとしていた子どもたちも、みんな自然にすべり降りてA子のすべる道を開けた。

私はそれを見て、胸が熱くなるような感激を覚えた。A子が常からみんなのように活発に遊べない子であることは想像できた。

そしてN先生はその子のことをいつも気にしていられることも先生の態度から感じとられた。

ところが私の心を打ったのは、A子に対するN先生の深い愛情

が、他の子どもたちにも通じているということなのだ。「A子ち

ゃんがすべらはるえ」といった時のN先生の眼は、じつと彼女にそそがれ、やさしい先生の声はA子を励ますように受けとれこそ

すれ、決して「みんなのきなさい」と注意しているように響かなかつたのに、子どもたちは先生の声を聞くと素直にすべり降りてA子のためにすべる道を開けたのである。

私は日頃N先生が、どんなにひとりひとりの子どもを大切にしているかを知ることができたと思った。また子どもたちも、友だちひとりひとりを認め合っているふんい気がこのクラスに流れているのを感じて胸が熱くなつた。A子はいきいきした顔で元気にすべり降りると、向こうへ去つて行く先生の姿をじっと目で追つた。またすべり台の傍へ戻つて来てくれる先生を待つてゐるのであつた。

こうした一時間の遊びの中に、私は先生のすばらしい「指導」をみたと思つた。N先生とO君の砂場での関係。すべり台でのA

子と先生とのかかわりあい。こうした関係が彼らの経験を助け、遊びの創造的な発展をうながし、活動への意欲を育てる。こうした教師とのかかわりあいを経験して子どもたちは成長していく。

私は「指導」とはこのように、教師と子どものかかわりあいの中にあるのだと思う。

二、子どもひとりひとりの経験を尊重する

六月の保育室。たらいの中に蛙やえびがにが飼われている。たらいのふちに集まつて、じつと蛙を見ている子どもたちがいる。

教師「あっ、よう泳ぐね。あっ、石の上に飛んだわ」

恐る恐る蛙の背中をさわつて、あわてて手を引込めるA君。

教師「あら、A君背中にさわったのね、ちょっとと気味悪いね」

手に乗せてじつと眺めているS君。今度は肩の上に止まらせて、落ちないようにそろそろ歩いてみると、

床の上をとぶ蛙と並んで、自分も同じようにいっしょにとんでいるK子。

どの子もそれぞれ蛙やえびがに夢中になつてゐる。

感極まつたような声でM子が「これが本当の蛙やなあ」とひとりごとをいう。

なかなかとばない蛙を持ったC子は、「どぶ蛙かして」と友だちに申し込む。

こわごわ見ていた子どもたちも、次第に蛙にさわってみるようになり、しまいには牛乳瓶の蓋に割箸をくっつけてスプーンを作り、金魚すくいならぬ蛙すくいの遊びを考え出したりして、子どもたち各自が夢中になつて蛙と遊んでいる。

この保育の中では、子どもたちひとりひとりの経験が尊重されている。そしてM先生はこうした子どものひとりひとりの経験に対して、その子の発見や、感動や行動をそのまま受け入れ、それと言葉でひとりひとりの子どもに伝えようとしている。いつそう子どもの経験をいきいきしたものにしているように思われる。

三、子どもの経験を教師も共に感じ理解する

最近私はこんな楽しい保育を見たことがあった。

部屋の真中にはセロファンやひご竹、松ぼっくり、木片等の材料が置いてあつた。子どもたちは製作の材料にする発泡スチロー

ルを部屋の外へ取りに行つたが、間もなく数人が一かたまりになって発泡スチロールのはいった大きな袋を運び込んできた。

最初の子どもたちは、部屋の真中まで来ると袋の中をのぞき込んで、中から一つずつ形のちがつた材料を取り出しはじめた。大きいまづまの発泡スチロールを取り出しているうちに、だんだん勢いがついてぽんぽんとほうり出す状態になつてきた。

すると第二、第三と続いてはいつてきた袋をもつた子どもたちも同じようにまねてスチロールをほうり出し始めたのだ。みると

るうちに部屋はスチロールで真白にうずまる。子どもたちは拡がった材料を、今度は上へ向けて投げはじめる。軽いスチロールが舞いあがって落ちてくるのがおもしろいのだ。自分の肩や頭に当たつてもおかましく、むしろその感触を楽しんでいるかのように夢中になつてほうりあげている。

なかには積み重なつた材料の上にうずくまつたり寝ころんだりして、スチロールの暖かさを肌で味わっている子もあつた。四十人近いこのクラスの子どもたちみんなが、もうこのことがおもしろくてたまらないといったようすでいきいきと遊んでいた。

Y先生にとってそれは予想もしなかつた光景であつた。製作材料にするために、この発泡スチロールを集め歩いた時のこと思い出すと悲しい気持がした。昨年も一昨年も放課後の半日をついやして商店街の電気屋を一軒一軒たずね歩いたり、店先に捨て

てあるのを拾つたりして袋に詰め、格好の悪さもがまんして自抜きどおりを自動車を避けながら大きな袋を三つもひきずつて歩いた時の自分の姿を思い出した。

まさかこんなことが起ころうとは夢にも思っていなかつた。先生

生の計画どおり子どもたちはこの発泡スチロールを使って何かを作ってくれるだろうと思っていたのに。しかしあくまでおそい。子どもたちはスチロールをなげている。どうすることも出来ない。止めさせようと思つても簡単に止めそうもない。あきらめた先生は子どもたちの遊んでいるようすを見るより他に仕方がなかつた。

子どもたちは投げてみたり、手首にはめてまわしてみたり、頭に乗せて歩いたり、形を比べたりして遊んでいたが、そのうち、いつとはなしに、誰からともなく適當な材料を選んで、思い思いの製作に真剣に取り組みはじめた。

こんな中で、いつもみんなと同じように遊べないT君が、投げ

ていた材料の中から長方形の枠を見つけ、その中に顔を突込んで「ガオー」と怪獣のまねをしながら歩いている。先生が「T君はテレビの怪獣になつていてるのね」と声をかけると、彼はますます得意になつて本物の怪獣になつたつもりで歩いていたが、やがてその枠を使ってテレビを作り始めた。セロファンを貼つたり、美しいまんがの車の絵を何枚も貼り付けたりして、見事なカラーテレビを完成した。しかも値札までぶらさげて、いかにも満足した

ようすでこれを抱きかかえていた。このテレビは彼が完成した最初の作品であつた。その後T君は製作に積極的に取り組むようになつていった。

私はこの保育を見て先ず感じたことは、自由で開放されたふんい氣に満ちあふれているということである。こうしたふんい氣があればこそ子どもたちは、のびのびと好きなことをして遊び、遊びながら材料の持ち味をためし、そして自分たちのやりたい仕事を真剣に取り組んでいくことができたのであろう。

Y先生の保育は、先生のねらいどおり、ひとりひとりの子どもに力いっぱいの活動をさせ、その中でくふうと創造性を育てる楽しい製作の時間となつた。このクラスに流れているあたたかく自由なふんい氣が、環境に自から積極的に働きかける意欲的、創造的な子どもを育てているのではないかと思う。

更に私が感心したことは、Y先生がその場において、ひとりひとりの子どもが今、何を経験しようとしているのかを、子どもの立場に立つて感じとり、その子どもたちの経験を尊重すると共に、教師もその経験を共に味わおうと、子どもについていかれたからこそ、そこにはばらしい子どもの成長が見られたのだと思う。

「指導」とは日々の保育のあらゆる場において、教師の計画的ななどなみをとおして子どもの成長を意図的に助ける働きであると同時に、あえて意識的におこなっているとは感じない子どもとの関係の中にも、たいせつな指導がおこなわれていることを、しばしば見る思いがする。

特に幼稚園における指導は教師と子どものかかわりあり、人間関係の中に大きな意味があるのではないだろうか。そのかかわりあいの中で、特に幼児の成長を助けるための有効な指導と条件として、私は先に述べた三つの指導事例の中から、次の四点をひろつてまとめとした。

- ひとりひとりの子どもの主体的な経験が、尊重される自由であたたかいふんい気がつくられること。
- 子どもの経験を共に感じとり、理解しようとする教師であること。
- 子どもが言葉や行動で表現しようとしているものを敏感に感じとり、これを子どもに伝えてやること。
- 子どもを信頼し、子どもの主体的な活動を待ち、子どもについていくことのできる教師であること。

アジア太平洋地域

OMEPE会議今秋東京で開催

日本の保育界も、ようやく世界幼児教育機構(OMEPE)に正式加盟し、来年度の世界大会(三年に一回)に備え、昨秋は玉川大学において第一回国内会議が開催され、第二年目の本年には、次の要領でアジア太平洋地域(含オーストラリア)会議が開催されることになりました。

○期日　十一月十六日～十九日
○会場　東京文化会館小ホール
○日程　第一日　開会式・記念講演

第二日　各国内外会議報告・分科会(3)
第三日　映画・シンポジウム・閉会式
第四日　施設見学・観光(国外参加者)
国内参加者　二千円(予定)
国外約五十～七十名
国内約五百名(限定)

○申込　八月三十日まで
東京都千代田区九段北四の二の二五
学会館内(〒一〇一)日本幼稚園連合会
気付　OMEPE地域会議事務局
・案内書及び申込用紙等は、各保育団体事務局にお問い合わせ下さい。

手先の動きと子どもの感情 ④



清水エミ子

子どもたちは自分の体の前で、自分の手を、そしてゆびを、しゅん間にしゅん間に無意識に動かしている。

無意識なのだな、とわかるのは、 $\frac{1}{2}$ 秒位の早さで変化してしまうからだ。そして、二度と同じように動かすことはないと思われる。よく似ていて同じようにみえても、どこか表情がちがっている。手やゆびのあげ方、あげた角度は同じであっても、その時、その時の手とゆびの表わす表情は、ちがっている。

おんなじつくえにすわったのにみやこちゃんの手はあつたかかったよ。

それでさよこちゃんの手はつめたい。どうしてかなあーふしぎだね。

あたしの手はどつちだったかわからなかつたの。

せんせいどつちかみてよ。

と、きよみが、私の前に手をひろげて示した。私は、きよみが、私との握手で、どんなことを発見するか、ためしてみたくなつたので、だまつて手をにぎついていた。
すると、

あれせんせいはちつとあつたかいね。あたしはそいじゃちつとつめたいの？
と、私の顔を真けんに見上げていてから、

せんせいみやこちゃんと手をつないだときねみやこちゃんたらゆびをちょこちょこちょこちょこうごかすの。

さよちゃんはねおとなしいつなぎかた。
おもしろいでしよう。

ちょこちょこうごかすとあつたかい手になるのかな。

じつとしてるとつめたくなるのかな。

と、ひとりごとのようにつぶやいていたのだ。

私はこのきよみのことばを、ひとりひとりたしかめてみたくなつた。

一、保育者(私)から、積極的に手をつないでみること
にした。(一の時の手とゆびの反応をみる)

◎条件

・活動をしていない時

・ひとりでいる時(活動に入る前や、後の時)

・気づかれないように、なるべくうしろやよこから自然の状態
で手をにぎるようにする。

・にぎって反応をみてから、「いつしょにあそびましょう」と
か「あつたかい手ね」などと話しかけてみるようにする。

◎反応のタイプ

- ①・私の手がふれると同時にきんちょうし、ピクッと、ゆびをうごかし、つながれるまでいる。
 - ・きんちょうし、ピクッとゆびを動かしてからギュッとにぎり返してくる。

このタイプの子どもたちは、自分は今しつぱいしていないのにどうしてしかられるのかという、ぼうぎょのたいせいで問い合わせてくる子が多いようだった。

- ②・にぎったしゅん間的反応はないが、だまってつないでいるうちに、ゆっくりゆび先がうごき出してくる。
 - ・しばらくつないだあと、ピクッと、と反応がかえってきて、そ

こんな子は、はじめてれくさうな顔をするが、ギュッとにぎりかえす前後に、ため息をついたり、私の顔をのぞきこんで見てはなしはじめる。

・ピクッと反応してから、ピクピク、ひつきりなしに反応をくりかえしている。

思いがけないことで、びっくりしたり、うれしくて胸がドキドキしてしまい、ゆび先がうごきつづけている、と思われる子も多かった。

・ピク、ピク、と反応してから、こんどは自分から私の手をしげり返してきたり、ゆびの第1、第2関節を動かして、ゆっくりの反応をしばらくつづけている。

・ピクッ、と反応して、私の顔をみてから、もう一方のあいている手の平を、にぎっている私の手の上にかきねてくる。

・ピクッと反応して、あわてて「なあに」とせきこんで問いかえてくる。

返してくる。

のあとは、ある間かくをおいて、ゆび先が反応している。

・しばらくして、ゆっくりしたりズムでにぎりかえしでくる。

(手の平全部をつかってにぎりかえしの反応をする)

・しばらくしてから、一本のゆびを、私のゆび（ふれでいるゆび）にからませてくる。

・しばらくしてから、にぎった手を自分の思うままに、上に上げたり、よこにふつたりしはじめ、次に話しへじめる。

③・ふれたとたんに手をふりはらってしまう。そしてその場から移動してしまう。

・ふれたとたんに手をふりはらってしまい、私の顔をみつめている。

この時、もう一度私が、だまつて手をさしのべてみる。

・あらためて、手をぎりにくる。

・手を自分のうしろにかくしてきよひを表わす。

・私のさしだす手をみながら、のそそのそその場から移動していく。しかしさりげないような表われもみえる。

・自分の手を、もういちどみなおして、おずおずと手をさし出してくる。

あらためて、手をにぎつたあとに、①や②や③の反応を表わしてくる子も多かった。

④・私のなすがままにまかせ、力を全くぬいてしまい、骨なしの

手のようになってしまふ。しかしこの時は顔がいろいろの表わされ方を示していくことを発見した。

◎考察

手をにぎると同時に私は子どもたちの顔での反応もつかみたいと思い、顔をのぞきこまないようにして観察することにつとめてみた。結果、やはり、しゅん間の反応はゆびの方が早い。まずゆびで、ピクッとか、ギュッとかいやりと手をうしろにさけてから、顔での表われがおこるようだ。

これは、実験した八十名全員がゆび先の反応（何らかの）の方が先だったといえるようだ。

①の反応を示したタイプの子どもたちは、やや男児の方が多い

第一回のはじめの反応のあと、ゆっくりゆびを私の手の中で動かし、いつまでも手をはなしたがらないタイプには、ひとりっこ子、末っ子などの、まだまだ甘えたい気持の多い子どもたちに多かったようだ。

②の反応を示したタイプの子どもたちは、大半は、女児に多い反応のタイプのようだったが、ゆびをからませてくる子どもたちは男児に多く、生まれのおそい子どもたちに多くみられた。

ゆびをからませながら顔をのぞきこんで、次に自分からはなし

はじめ、なかなかゆびをはなそうとしないのだ。

まだまだ安定したり、しっかりとしたものにつかまつていてみたいという反応ではないかな、と考えられたのだ。

③の反応を示したタイプの子どもたちは、集団になじむのもおなかつたし、友だちとの交わりも少ない、ひとりであそぶことをよろこびやすい子どもたちに多かつたし、消極的で、どんなことも友だちの後からついていっても、まんざくしてしまったタイプの子どもたちのようだ。

ひとつの活動から次の活動に移るのに時間がかかり、どんなことにもなじむまでに時間のかかる子どもたちのようだ。

以上のように大きっぽにみどおすことができるようと思われた。

しかし、これは、この反応を示した時の条件での結果であることを忘れてはならないと思う。

この実験、反応調査をくりかえして行ない、その結果での考察でなければ信頼性はとてもうすいことはわかるが、しかし、この一回ないし、二、三回の反応からも、大きく三つのタイプが、見とおせたという結果からも、指先での表情の大切さと、それの持つている意味の大きいことを感じさせられたのだ。

受身の時のゆびや、手の反応の一部であることをもういちど考えると同時に、顔や体から、そしてことばから受ける反応、心の

表われとはちがう、かくされた表われ（ピクッ、ピクッ、とする）その表われ方、これは何かことばや文字で表わせないなんともいえない反応なのだ）があることをよみとるのには、すばらしい実験だったと思う。

子どもたちの心の中をしらさせてくれる。

つかまえたせんせいの手。

あつちへいったり こつちへいったり なかなかつかまらなかつたよ。

・子どもから、積極的に手をにぎりたいといつててくる時。

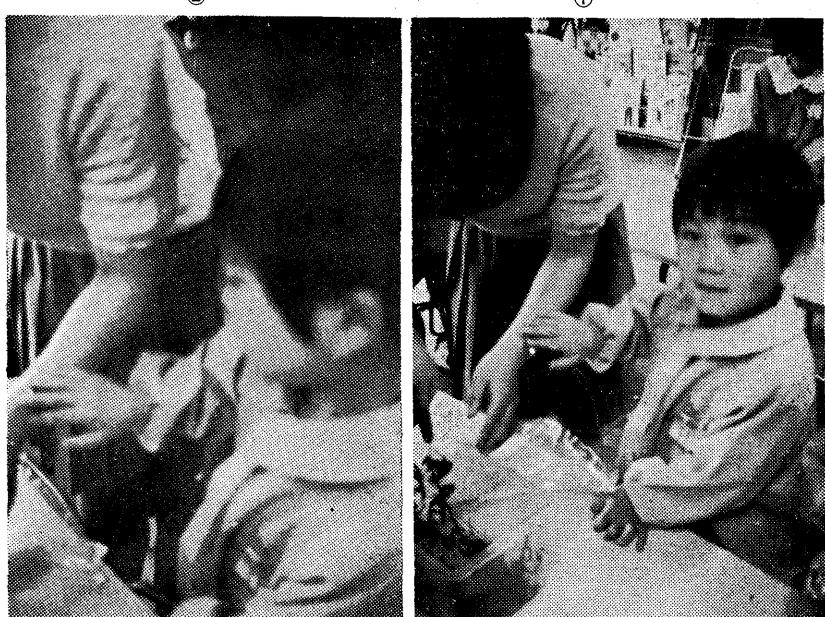
・だまつて私の手をそつとにぎつてくる子。

・うでを手のひらで、ベタリベタリとさわってきたがる子。いつてしまう子。

・ゆびをにぎるやいなや、自分の口に持つていってなめてしまふ子。

など、子どもたちの方から、私の手やゆび、うでに積極的にはたらきかけてくる時の反応もいろいろであり、その子どもたちの心の表われであることに気づいたのだ。

写真①～⑥ 保育者と子どもの手と手のふれあいのながれ



二、子どもたちから、積極的に、手をつなぎにくる時の、手とゆびの反応をみるとことにした。

◎条件

・なるべく子どもがひとりでいる時、そばに近づいていき、手がふれあいやすいように体を近づける。（活動していても、していないなくてもよいことにした）

・なるべく自由な活動の時の反応をみるように心がけた。

◎反応のタイプ

① 意識して、自分のゆびをさかんに動かしながらふれてくる。
・ゆび一本、人指しゆび、中ゆび、というように特定のゆびを動かしながら、私のゆびを目がけて近づいてくる。

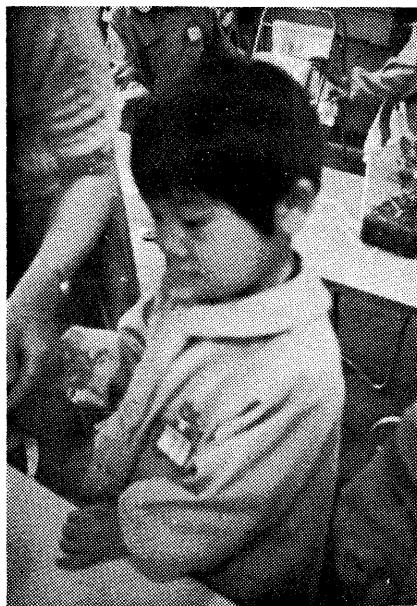
・手の平全体を何となく動かして、ふれてくる。

・小ゆびなどのよこばらを、私のうでにふれるというより、ぶつけてくるかっこうでふれてから手をつないでくる。

② 無意識のようなようすで、ゆびを少しうごかしふれてくる。
(ふれるというより、さわったことをきっかけに手をつなぎたくなる)

・手やゆびにちょくせつさわってくるのでなく、私の服やズボン、スカートにさわって、ワンクッシュンおいてから手をにぎつ

(4)



(3)



てくる。ひかえめな子。

③ ふれたいのだが、どうやってよいかわからず、ゆびをこうちよくさせ、きんちょうさせてそつとふれてくる。

・人指しゆび、中ゆび、くすりゆびの三本をぎゅっとくっつけ、第二関節位までそらして、そつとふれてくる。

・小ゆびだけ、こちょこちゅうじかして、私の小ゆびにからませてくれる。

④ 両方の手のひらで、私の手の平をめがけてつつみこんでくる。

・つないでと、ことばと同時につないでくる。

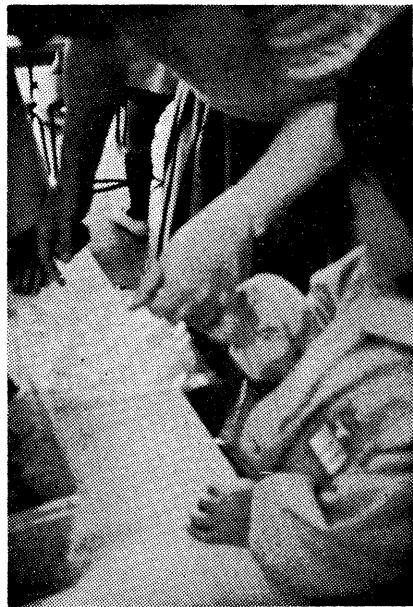
・かおをのぞきこんでから、手をにぎつてくる。

・しゅん間手をにぎってきて、それをふつたり、持ち上げたり、両手で私の手を遊具のようにいじくりまわす。

というようすに、子どもたちからはたらきかけには、保育者がはたらきかけていくのとはちがった表われがみられたし、心のこまかい動きをよみとるのにやくに立つことを発見したのだ。

◎考察

子どもが、私に近づいて来た時、私はなるべく、子どもがふれやすいように私の手の力をぬいて、ブラリと体のよこにぶらさげておくようにつとめた。



・これは、子どもたちがひとつのかまえの状態で私の手にはたらきかけるので、私の手にふれる前後の反応が、大へんに心を表わしていることに気づいたのだ。

先生と交わりたいという心が、手をつなぎたいという心が、ゆび先をきんちょうさせ、全神経がゆび先にあつまつた状態で、私の手にちょうどせんしてくる子どもたちと、全くリラックスして、ゆっくりした表われで（甘えるように）べったりと、私の手に向かってくるタイプに分かれるようだ。

ママ、あたしきょう しらないうちに せんせいと手つないでたの。いいきもちしたよ。

あたしもつなぎたいけど どうやればいいの おしえてよ。

このように消極的な子どもたちが、保育者と手をつなぎたい、ゆび先にふれたいという心が、ゆび先のきんちょうから、うかがえりなのだ。

何かはなしかけたい、たのみみたいという心の表われをまず手をもち上げゆびに神経を集め保育者に近づいてくるのだ。そしてうでやゆびにそっとふれてから、顔をあからめたり、タメイキをついたりして、「あのねせんせい」とか、「これでいいの」とかはな

はじめるのだ。

こんな消極的な子どもたちのゆび先をみつめ、私たち保育者をいつ、どんな状態でもとめているのかをよみとっていくことが大切だなあと、この実験をこころみて強く感じたのだ。

ぼくの手のあつたかさとせんせいの手のあつたかさとはじめはちがつたんだよ。

でも、つないでたらおなじになつちゃつたじやないほらね。
きょうはぼくとせんせいがいちばんのなかよしだからなん
だね。

私は、このことばを聞いた時、子どもたちと手をふれ合わせること、手をぎり、つなぐことが、こんなにも大きな意味を表わしているということをあらためて感じさせられたのです。

手の、ゆび先でのふれ合い、反応が、心と心を結び、信頼の心を育てていくということをはつきりと感じさせられたのです。

どんなよい保育をしても、活動もなげかけても、保育者と子どもたちの心が結ばれていなければ、表面的な活動で終わってしまいます。

心がかよい、そして信頼感がはつきりと生まれ、その心の上に安定して行なわれた活動こそ、子どもたちの血になり、肉になる

のではないでしょうか。

子どもたちへ、積極的に手をふれていってみること、ゆびをからませ、手をにぎってみるとくりかえしていくなかで保育者と、その子どもの信頼の度合をたしかめていくことができます。いろいろな場での手と、ゆび、手の平での反応で、心と心のつながりの程度をよみとる努力をしたいのです。

顔の表情、ことばの反応に合わせて、手やゆびの反応をみのがさないくんれんをしなくてはならないと、しみじみ思うのです。子どもが積極的に手をさしのべ、にぎつてくる時の反応でもその子どもの信頼の程度がわかります。

いまは、全く安心し信頼しきつて私の手をにぎりに来ている。こんな時、子どもたちは、ことばは少ないのです。顔や、体の表情も、わるくはないが、平凡な表われしかないのでです。しかし、手やゆびは、はつきり、しょうじきに、反応してくれるのです。子どもたちの手やゆび、手の平の反応を見つめ、いろいろな方法で、保育者が手やゆびを示し、反応をしていくことによって、子どもたちの信頼感が育つていくのです。

ただ、反応を見つめるだけでなく、心と心の結びつき、信頼感の度合をふかめ、ひろめていくために、手とゆびの反応を、多面的に見つめていきたいと考えます。

子どもの発案によるあそび

三歳児十一、三学期

(2)

田中都慈子



のりの使い方が、前よりもじょうずになつた程度。

(2)

一学期の続きで、もようをくふうしてかくよくなつた。

(3) ウルトラセブンごっこ

ブロックでつくつたピストルをもち、制帽のゴムを上にはめ

一学年以上へて一人ひとりの個性がはっきりしてきたりよしと思われる。どんぐりひろい、運動会、遠足、クリスマス会と特に行事の多い時期であつたが、一段とあそびが発展し、水を使っての砂あそび、えのぐで絵をかくなど、活発にあそぶことができた。

二
學期

子どものようす

あそびの発展

(1) 旗つくり

一学期からの続きで、わりばしに色がみをつけたものである。

とあそびをしていった人たちが「赤ちゃんが病気になつたのでのせ
てください」といって乗つてから救急車にかわる。一、三日食堂
車、救急車ごつこが続いた。

(5) 人形げきあそび

朝、ブルーナの絵本のパンフレットをのりつけ紙に使おうと部
屋にもってきたら、それを見つけて、切りぬき、わりばしには
り、ペープサートのようにし、まま」とコーナーを舞台にあそび
がはじまつた。会話の声は小さくて聞こえなくなるので、時々、
観客が舞台の人とけんかすることもあつた。切符をつくる人もで
きて、時々思い出したようにあそんでいた。

(6) ロケットつくり

小箱やヤクルトのあき容器を使ってロケットをつくる。

(7) ケムシつくり→びつくり箱

オブジエテープを二本（二色）をあみこみ、五歳児がつくつて
くれたのをまねしていたが、それをふたのついている器（アイス
クリームやプリンのあき容器）の底につけ、ふたをとるとそれが
飛びだすようなびっくり箱をつくりはじめる。上に顔をかいたり
したのもあつた。

(8) 時計づくり

一学期の続きであるが、ベルトの部分を紙を切つてつけたり、

(9) カメラづくり

オブジエテープを使うものもあつた。数字を自分でかいたり。点
で表わしたりする人もいた。

(10) 粘土のどんぐり山

どんぐりひろいに行って、もつて帰ってきたどんぐりを粘土の
山にいっぱいいくつづけて、『どんぐり山』をつくる。しばらくつ
くったものを保存しておいたが、中から虫がでてきたりしてやめ
になった。どんぐりを目や鼻にして顔をつくつたりしてもあそ
んだ。

(11) 小人のおあそび

朝、「ハイホー、ハイホー」といって部屋に入つてきた子ども
がいたので「小人さんなの?」といつたことから、小人の話にな
り、とんがり帽子をつくつて、子どものいうところの『小人のお
あそび』となつた、とんがり帽子をかぶつて、「白雪姫」のげき
あそびまで発展した。スカートをつくつたり、積み木で、家やお
城をつくつたりしてあそんだ。

(12) ケーブルカードづくり

空箱に窓やドアをかき、それを糸におらさげた簡単なものだ
が、つくるのをみていたまわりの子どもたちが、それを使いたく
て、とりあいとなる。

- 誕生会の時に、その月のお誕生の人에게写真をとりに先生がカメラをもって部屋にみえたことから、カメラづくりとなる。あき箱などで、かなり形のまどまつたものができた。チューブのふたやシャーペットの容器がシャッターやレンズとなつた。
- (13) 宇宙船ごうせん
- 積み木を高く積み上げ、中に座席をつくりロックでピストルをつくり、帽子をかぶつてのりこみ、宇宙船ごうせんをする。
- (14) エプロンをつけてあそぶ
- エプロンをつくつてというのでリボンと雲竜紙で簡単なエプロンをつくつてあげたら、男の子も女の子も、つけておそじをしたり、はたきをかけたりする。女の子は、何日かそれをつけてあそんでいた。
- (15) キリンの製作
- 五歳児の動物園どうぶつえんを見に行つて、自分たちもつくるといい出し、ダンボールと数個の空箱とセロテープの空き容器四個でつくる。えのぐで色をぬる人、荷づくり用のセロテープで首をつけた人がでて、組全体がつくる。いっしょにシマウマもでき上がつた。ショップをつけたり、耳をつけたり、たてがみをつけたり細かいところもくふうしてつくった。
- (16) サンタクロースのあそび

十二月のはじめ頃、子どもたちが「Sちゃんがサンタクロースになるといいよ」とい出した。Sも「僕なるよ」というので、小人の帽子の時つくつたのと同じ帽子を、赤いラシャ紙でつくり、まわりに脱脂綿をつけ、ひげは、画用紙の上に脱脂綿をはりつけ、耳からかけ、雲竜紙で袋をつくり、ロックを中心つめて、サンタクロースになった。しかし、ひげがのりづけのため、涙がでてくるからいやだといい、ひげなしで、しばらくあそんだが、あまりもあがらなかつた。

その他、めがねづくり、望遠鏡、テープレコーダーづくりなどが、行なわれた。

助言、誘導

二学期は、一学期から続いたあそびに加えて新しいあそびが並行して行なわれたが、一つのあそびが、長い時間行なわれるのでは、種類は多くなかつた。主に新しいあそびは、年長組のつくつたものからヒントを得たもの、行事などにむすびついものが、みられた。

一学期どちがつて製作を手伝うだけでなく、材料の使い方、セロテープ、のりのつけ方などを、その機会に指導したが、子どもたちは出来ばえよりもつくる過程を楽しんでいたようだ。教師の

誘導であそびがもりあがつたのは、(5)人形げきあそび、(10)白雪姫のげきあそび、(14)エプロン、(15)キリンの製作、(16)サンタクロースのあそびなどである。子どもたちがだんだん協力してあそぶことができるようになつたため、大きなあそびに広がつていけたようだ。

三学期

ナドモのようす

「あぶくたつた」や「たけのこ一本おくれ」「かごめ」などの集団あそびが、さかんに行なわれた。天気のよい日は、サッカー（ボールを足でけるだけの）をしたり、霜柱で庭にでられない時は屋上でかけっこをしたり、遊戯室で、マットや飛び箱などを使って十分に遊んだ。活力も、男の子が多いので、発散できるように心がけた。二月から、三歳児二組を一つの組のようにして混ぜて活動させたので、友だち関係は、変化した。

あそびの発展

- (1) レストランデータ

二学期の汽車、食堂車の続きとし行なわれた。

行なわれた。



- (2) 高速道路づくり
「ままで」と道具がへや中に広がり、レストラン“ごっこ”をする。すきなものを注文する人、牛乳のふたのお金をつくる人、“ごちそうを運ぶ人などがでてきて、何日も続いた。

たのよう並べ、その上に板をわたし、何段にもくみたて、その中連結汽車や、自分のつくった自動車を走らせる。一学期のものよりも、もつと巧妙で、構成力もできただようだ。

(3) おやまのおやまのうた(上図参照)

何人かの子どもたちが、節分を前に鬼の面をかぶりながらあそんでいる時に、そばでおべんとうを片づけていた子どもたちも、口をついて出たうたをかきとつたものである。すぐピアノで弾いてみたら、他の子どもたちも寄ってきてみんなでうたつてあそんだ。次の日、そのことを覚えていた子どもが、朝の着かえをしながらその続きをうたった。それをきいていた子どもが、手続きをうたい、しばらくそれが

続き、長いうたとなつた。

(4) 手さげづくり

きれいな包装紙とオブジェテープで、簡単な手さげをつくる。

帰る時に、自分の荷物をそれに入れてもって帰った人もいた。

(5) ウルトラ警備隊(こっこ)

ウルトラセブンごっこが発展したもので、あそびの内容は同じであるが、呼び名が変わり、時々おまわりさんの役もする。ほどんど同じメンバーである。トランシーバーをつくって、「こちらウルトラ警備隊、応答願います」とよびかけてあそぶ。三学期中続いた。

(6) 風車づくり

一、二学期を通して行なわれたものの続き。しかし、今までは、教師が手伝つてつくっていたが、紙を折つて切ることなど、一人でできるようになり、わからない人に教えてあげられる人までてきた。

(7) 積み木の飛行機あそび

小型積み木と大型積み木を使い、へやいっぱいに大きな飛行機をつくり、「ブルン、ブルン」といながら乗る。何台もできることもあり、積み木のとりあいとなつた。一台を五、六人で共同してつくっていた。

助言・誘導

三学期になつて、クラスとしてのまとまりがでて、安定してあそべるようになつた。友だち同士で問題を解決できるようになつてきたため、特別に誘いかけることは、少なかつた。製作の細かい個所を手伝つたり、材料を出したりしただけで、どんどんあそんでいく状態であった。クラスいっしょにひとつの活動をし、クラスの別をなくしたため、不安定になつた人もいたので、個人的に指導することが多かつた。

(暁星学園幼稚園)

変更のお知らせ

これまで毎年六月にお茶の水女子大学附属幼稚園で開いてきました「幼児教育実際指導研究会」は、当大学附属校園の話し合いの結果、当分休むことにしました。

従つて秋には行なわないことになりました。
五月十日

お茶の水女子大学 文教育学部
附属幼稚園内 幼児教育研究会

ヨーロッパの旅 (五)

平井信義



ロンドンでの四日間は、今回もまた私の心を分裂させた。いつ
たい、ロンドンの正体はどこにあるのであろうか？この思い出
は、五年前に来た時にも、十五年前に来た時にも、私の心を占め
た思いと同じであった。

ピカデリー・サーカスに群をなすビートルズたち、ほかの国々で
は見ることのできないほど多くの超ミニスカートの女性たち、ホ
テルの従業員の支配的な態度、滑稽味にあふれた衛兵交替、美し
く広い三つの公園などが断片的に目にうかんでくる。期待に反し
て少なくなつたのは、イギリス銀行の周辺のイギリス紳士——す
なわち、シルクハットやトップハットをかぶり、白い手袋を片手
に、新聞とこうもり傘を小脇にかかえ、周囲の人々を鼻にもかけ
ず歩いていく姿であつた。しかし、何人かのそうした紳士に会う
ことができた。昔と全く同じ姿で、一人は著しく背が高く、一人

は太った紳士であった。ロンドンでのこのような諸々の姿や光景
が、どのように調和しているのであろうか？調和があるとすれば、それは何を意味しているのであろうか？

三日目の午前を、私は、リジエンツ公園とケンシントン公園の
散策に当てた。地下鉄でBBC放送局の脇に出て、懐しいチバ製
薬会社のホテルの前に出た。このホテルには、ちょうど十五年前
に、一〇日間ほど泊めてもらっていたのである。無料であったから、貧乏な留学生であった私には、何よりもうれしいことであつた。部屋は小さかつたが、小さいで、白いカーテンに降り注ぐ
戸外の緑が美しかったのを、今もなお思い出すことができる。食
堂には四つし五つのテーブルがあり、そこで朝食をとるのであつたが、イギリス以外の外国人が多く、私もその一人であった。イ
ギリスふうの朝食で、マーマレードがおいしかった。

玄関の扉は重く、それを力強く押して出入りした。その扉は、今回もまた全く同じであつて、私はその扉を押して中に入つてみたくなつたほどである。しかし、当時の若い給仕の女性などはいるはずがない。その顔も思い出せない。十五年の歳月は、人の姿をすっかりかえてしまつてゐるであろうが、扉は全く変わつていなかつた。

その扉を振りかえり振りかえり、私はリジエンツ公園の方へのぼつていった。道は、だらだらと傾斜している。十五年前に、この道を毎日のように歩いたものである。留学も最後のコースになつて、ロンドンからパリー、ローマ、アテネ、カイロ——と南廻りで帰国する旅程のスタートがここであつたが、すでにズボンはよりよれになり、Yシャツも洗濯に洗濯を重ねて黒くなり、襟の型もすっかりくずれていた。しかし、何でも見てやろう、何でも経験してやろう——という若い意気込みにあふれていたから、そのような姿もおかまいなし——という風態であった。しかし、英國紳士の間にはさまたりすると、威圧を感じないわけにはいかなかつた。それと同時に、それをはねかえすような気魄があつた。今の私は、すでに髪には霜があり、老眼鏡を用いる年齢になつてゐる。そして、古い日々のことを懐想することの多いヨーロッパ旅行になつてゐる。

リジエンツ公園に入ると、美しい芝生が続き、人影もまばらで

あつた。私はベンチに腰をおろし、芝生の上にもえ立つ空氣の動きを、右に左に追いやりながら、時間にこだわらず、体を休めることにした。居眠りがでてきたら、それに身をまかしてもよい——そんな気持であつた。二三羽の鳩が舞いおりてきて、私の足もとの方へ、もの欲しげな目をして近寄つてくると、それを追うようにして何羽かの鳩が次々と羽音を立てて舞いおり、鳩の群は次第に私を囲むようになつた。私は、ポケットを探したが、何も食糧がない。「何にもないよー」と日本語で鳩に話しかけたが、首をさしのべるようにして、二三羽が更に近寄つてくる。手を大きく開いてみせると、その動きに、何羽かの鳩が飛びのくと、ほかの鳩も後ずさりするようにして、再び飛び立つていった。

背のまがつた年寄りが、杖をひきながら、入口の方から歩いてきて、私の坐つているベンチの一方の隅に腰をおろすと、手さげ袋から紙包みを出した。その途端に、すきまじい羽音を立て、何十羽となく鳩が舞いおりてきてその老婆を、取り囲んだ。紙包みの中から取り出され、ばらまかれるパン屑をめがけて、競うようにして鳩はつづいた。何回か、同じようにパン屑が投げられる、と、その度に羽音は右に左に動いた。遂に、包み紙についていたパン屑が払い落されると、鳩への食糧は尽きた。それでもなおも「おしまいなのにな」というような表情をして、私の方を向いて笑

顔でウインクをした。私も、笑顔をかえすと、ひと言、ふた言何

か言つたが、私はききとれなかつた。別に私に向かつて言つた
ようでもなく、鳩に向かつて喋つたようでもなかつた。それでい
いのだろう。八〇の齡いに耐えてきた老婆のモノローグと言うべき
であろうか……。一人身のひと時の幸せなのであろうか……。

きょうまで、どのような幸せを追い求めて生き続けたのであろう
か？ 私自身も、人生の三分の二を生きてきたが、これから三分
の一は、死への歩みを着々と続ける生活である。これから先、
どのような幸せを求めて、死への歩みを続けていこうとするので
あるうか？ これまでの人生の中の幸せは、いったい何であった
ろうか？

子どもたちの幸せのため——と思つて仕事をしてきたが、それ
が本当に子どもたちの幸せに通じていたであろうか？ 頭の中で
はそれを願いながらも、実践がそれに追いついていたであろう
か？ 頭の中での願い——といつても、それが果たして本物であ
つたろうか？ 多くの子どもたちのために、本物の幸せを保障
し、それを自分の実践の中ではつきりと実現するためには、これ
からどのような生き方をしたらよいのだろうか？

ふと見ると、老婆はベンチにうずくまりながら、目をつぶつ
て、居眠りを始めたようであった。動かない姿が、九月の陽射し
を浴びて、その影を私の方に投げかけていた。私は、そつと音を

立てないようにヘンチから腰をあげた。

再び地下鉄にのり、マーブルアーチにいた。そこがケンシン
トン公園の北隅に当たる。彼方の林がけむるほど広々した公園で
ある。中に入ると、折たたみ式の椅子がそこそこに並べられてい
て、すでに何組かの家族がその椅子で円陣を作り、弁当を取り出
して食事をしていた。そのまわりを幼児たちが走り廻つたりして
いた。ズックの椅子に背をもたせ、本を読んでいる若い女の子も
いた。私も、椅子の一つを移動させて、太陽の方に向けて位置を
定め、それに深々と腰かけた。軽い疲れが私をとらえていた。目
をつぶつた。落ちつくと、ゴーっという音が私の耳をとらえた。
ロンドンという都市の音であった。乗物の動き廻る音で、動いて
いる間は、気づかない音であった。遠くから、近くから、その音
は私に襲いかかってくる。疲れたからだを次第に包み、私をとり
こにするとともに、頭の牙えを招くような音であった。この音は、
東京でもしばしば聞いた。

特に、朝早く起きて書きものをしている時、次第に私の耳に響
いてくる音と同じであった。ゴーっという音。この音の中に、私
は何十年も暮したのだと思うと、それを余り気にしなってきた自
分の神経が、いつたいどのようになつてているのだろうか——と訝
つた。澄んだ音をきく耳を失つてしまつてゐるのではないだろう
か？ 都会で育つてゐる子どもたちの耳もまた、このような雑音

の網を通してもの音をきいているのではあるまいか？ この音はいわゆる近代文明を代表したモンスターのようなものではあるまいか？ 私は、改めて、子どもたちに、田園の生活をじゅうぶんに味わせたいと願つてきしたことの意味を感じた。

いつの間にか、私も居眠りをしたらしい。救急車のサイレンの音で、我に返った。時計をみると、正午近くになつていた。周囲を見廻すと、幾組かの家族の円陣が変わつていた。三〇分以上も居眠りをしていたのであつた。恐らく、今回のヨーロッパ旅行の中で味わつた初めての居眠りであり、快いものであつた。私は、背伸びをして立ち上がるが、明日はこのロンドンをたつて、パリへ飛ぶのだ——と、未練の残るモズレー病院の見学ができなかつたことを思い返しながら、芝生に細くついている小道を歩き始めた。

あちこちとロンドンを歩き廻つてゐる間に、超ミニスカートの女性の写真を次々と撮影した。あとで集めてみると二~三〇枚以上になつたほどである。最も保守的なイギリス女性が、このようなスタイルをしていることを、皮肉な気持で眺めようとする私の心が、このようにたくさん写真をうつさせることになつたのである。イギリスの紳士と対比させて考えてみたかった。ビートルズの写真も二~三〇枚になるが、これも、同じ気持から出発している。しかし、それは、私の心の中の対立でもあつた。

私の心の中には、古いものを大切にし、その型を守ろうとする気持が強い。しかし、古いものには型があり、それが強い力をもつてゐる。その型は、しばしば形骸となり、精神を見失つたものになる恐れがある。精神に新しい息吹を与えるためには、形骸を破らなければならぬ。形骸を打ちこわさなければ、新しい精神の息吹がほとばしり出ることができないような面がある。しかし、この形骸を破ることは大変なことであり、その反動が強くなると、全く新しい型をもち込まなければならなくなる。しかし、私には、新しい型にもなじめない面があるのであるのだ。新しい型には、古いもののよさが全く失われてしまう恐れがあるのである。古いもののよさと、新しいもののよさとを、どのように調和させたらよいのであらうか？ このことは、今度のヨーロッパ旅行でも、しばしば私の頭を占める課題であった。

同じことが、子どもの教育についてもいえる。子どもの教育の中には、古い型のものがたくさんにある。型だけの教育が行なわれていて、その精神がすっかり見失われている場合が少なくない。古い保育者の中には、その型を大切に守つてゐる人があり、それに対して若い保育者が反発してゐる。何とかして古い型を破つて、新しい息吹を保育の中に入れようとし、対立が生じていることも少なくない。しかし、古い保育者には、新しい型にな

じめにいるし、古いもののよさを手離したくないという気持ちが強い。古い時代の保育のよさと新しい時代の保育とを、どのように調和させて保育を実現したらよいのであろうか？

あらうか。

ロンドンのミニスカートは、私にとっては今更のように驚きであり、興味の対象となつた。膝上一〇センチに驚いたのは一昨年渡欧したことであつたが、今回のロンドンのものは、膝上三〇センチで、ちょうど子どものズボンのような感じがする。それがまた、実際に美しい。美しさを感じる時の女性の足が、実際に見事であった。足というものが、こんなに美しいものかと、今更ながらのように思い返されるのであつた。そうなると、足に美しい女性のミニスカートには、やはり目をそむけたくなるものがあるのに気づいてきた。そうなると、わが国の女性には、ミニスカートが向くであろうか？

ミニスカートに見慣れてくると、長いスカートが妙に思われてくるのも不思議である。ミニスカートが多い中で、長いスカートがやばつたく思えてくるのは、集団の力というものであろうか。数の多さが、一つの力となって、数の少ない者に対する見方を成立させていく。われわれの研究でも、その点で考えなければならない面がたくさんにある。子どもの一つの行動の基準が数の多さに求められることが少なくない。数が多い方が正常となり、数の少ない方を異常としてしまうことがしばしばある。それが真実で立することがある。おとなしい子どもが多い時には、少し元気のよい子どもが二、三人いると、その子どもたちの行動が攻撃的な行動とみられたり、おちつきのない行動のように思えてくる。殊に、一つのクラス、一つの園のみでなく、わが国の子どもが多く示す行動がおとなしいものになつてくると、暴れん坊やいたずらっ子は、異常行動の持ち主のように見られてしまう。このようなことから、子どもの評価に当たつてどのような基準を用いたらよいかが問題になってくる。基準は、その時々の文化的背景から、相対的なものになつてしまふ恐れがある。絶対的な基準を立てるのはどのようにしたらよいであろうか？

ロンドンの滞在は、モズレー病院の見学ができなかつたことから、公園にいつたり、ミニスカートやビートルズを追つて過ごす結果になつた。しかし、私の日本での生活の中で、このような社会の動きの中から、いろいろなものを考える余裕がなかつたことを反省させられ、大いに楽しむことになつたのである。昨日も、たくさんのスライドをスクリーンにうつしては、その当時のことを懐しく思い返したのである。

サンド・プレイ・テクニック

(箱庭療法)について④



秋山達子

私たちおとなも幼児期のおもいでや母親の乳房の匂いに、どこか郷愁をいだいているものです。児童は母親のこの大きな愛情と保護のもとにあってこそ、無事に成長していくわけですが、同時にこの同じ母親の愛情が過保護となつて、かえつて児童のこれからのがてにこうとする成長の芽をつんでしまうこともあります。

今回は、はじめてサンド・プレイ・テクニック(箱庭療法)に関して、児童と母親の問題について少しふれてみたいと思います。

今日では人格や情緒の発達が幼児期の環境や児童と両親との関係に深い関連があることはよく知られています。

生まれたばかりの赤ちゃんがはじめてすみっこ(箱庭療法)に関して、児童と母親の問題について少しふれてみたいと思いま

る対象は母親の胸であり、はじめて意識する。そしてこれは母親にだけ責任のあることでも覚えて、やがては自分でものを考へ、判断をし、二本の足で立って歩く独立した個性として成長していくのです。

生まされたばかりの赤ちゃんがはじめてすみっこ(箱庭療法)に関して、児童と母親の問題について少しふれてみたいと思いま

る対象は母親の胸であり、はじめて意識する。そしてこれは母親にだけ責任のあることではなく、どの児童もいつまでも母親の胸にだかれていたいと思う時もあり、また早く独立して一人前になりたいと望むことも

このような母親の持つ二つの面を説明した仏教の説話に、鬼子母神の話がありま
す。鬼子母は他人の子どもをとって喰う恐
ろしい女でしたが、ある時自分の子どもを
さらわれて、町中を嘆き悲しんで走り廻
り、最後に釈尊の教えを受けて、悔悛し
て、すべての子どもを平等に愛し育てる母
親となつて、子育ての神さまとしてまつら
れるようになつたのです。

いて、この心像とドーナツの色のように濃く、ケーキのように甘いつながりを持ちながら、安心して毎日を暮しているのです。

成長を阻み過保護の恐ろしい母親に変わった時です。そして赤ずきんちゃんは狼に変わったおばあさんに喰べられてしまうのです。

さらわれて、町中を嘆き悲しんで走り廻り、最後に釈尊の教えを受けて、悔悛して、すべての子どもを平等に愛し育てる母親となつて、子育ての神さまとしてまつられるようになつたのです。

また誰でも知っている「赤ずきん」のお話も、象徴的には次のように考えることでできましょう。

つみ草をしながら森の奥に迷いこんで、とうとう狼に見つかってしまいます。心の奥の無意識の世界にはきれいな花が咲いていたり、蝶がとんでいたり、いろいろとおもしろいこともあるのですが、あんまり奥まで行くと恐ろしいものも住んでいます。さてこの狼はなんでしょうか。よく女性を誘惑する男性のように解釈されています。

実際には、このような時に、理性的な父親や、先生方が気がついて母親に忠告してあげることができれば、赤ずきんちゃんもおばあさんも、狩人の出現によって狼のおなかの中から助け出されて、狼の形をした貪欲な母親は死んで、より大きな愛情を持った母親と、新しく生まれ変わった児童の自我が確立されるのです。

赤ずきんちゃんがおばあさんにもらつて、とてもよく似合うのでいつもかぶつて
いる赤いズキンは、母親の愛情と保護の印ともいえましょう。そして赤ずきんちゃんはこれをかぶつて暗い無意識の森の中に住

が、実はこれこそ子どもをとつて喰う恐ろしい母親像なのです。狼は赤ずきんちゃんを甘い言葉でだまして、一足先におばあさんの家に行き、まずおばあさんを喰べてしまっています。

このようすに神話や民話やお伽話には、母親というものの本質的なあり方が、いろいろと形を変えて象徴的に表現されていることが多いと思うのですが、このような母親像は誰でも心の中に持っているもので、

むおはあさんのところに「ブドー酒」と「ケーリキ」を届けに行きます。児童は現実の母親の他にも、心の奥にこのような母親像を持つて

この時こそ、やさしく子どもを抱いて保護しつづけてきた母親が全く無意識のうちに子どもを抱きしめすぎてかえって児童の

人たちはかりでなく、古代や中世の人たちの像とよんでいます。そしてこれは現代のそれをユングはクレート・マサーの原型心理学であります。

の間にも、また東洋にも西洋にも見られる共通した存在のようです。

例えばインドの時間を司るカーリーとい

う神さまは、女神ですがどくろの首飾りをかけてシヴァ神という破壊と創造の神さまを足の下にふまえた恐ろしい姿をしていますし、エジプトではナイル河が子どもを育てるやさしい女神としてあらわされています。

またメソポタミアの辺からは、大地の魔

術的なエネルギーをあらわす女神像の描かれた壺が掘り出されたり、メキシコの壺には乳房がたくさんついていたり、ずっと古い新石器時代のフランスの洞穴の中には、死をあらわす女神像の浮彫りがあり、また同じ新石器時代のものでは渦巻模様のある女神像も見られます。

このようにグレート・マザーの像は乳房や曲線であらわされるだけではなく、大昔から大地、洞穴、壺、渦巻模様などで表現

され、時の経過や死と再生というような主題とも関連して考えられていました。

最初にダンプとブルドーザーと乗用車を

それではこれから実際に、サンド・ブレイ・テクニック（箱庭療法）の中で、このような母親像がどのようにあらわされてくるもののか、東京大学の教育相談室の四方羅予先生の扱われた事例を拝借して、皆さんといっしょに考えてみたいと思います。

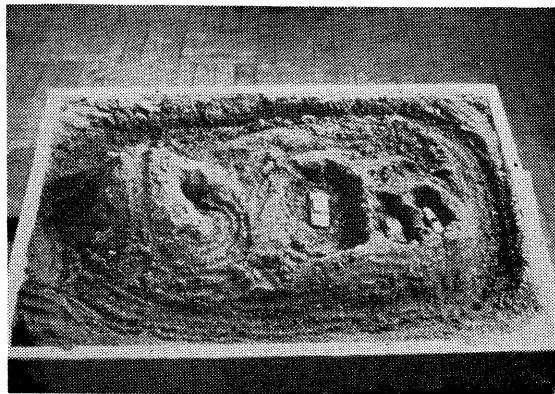
Y君は五歳で一つ年下の妹さんと同じ幼稚園に通っていますが、二人共病弱で、それは乳房がたくさんついていたり、ずっと古の上Y君は三歳位から少しども癖がありました。Y君が四歳の時に家庭の事情で関

西から東京に転居し、幼稚園にも通うようになったのですが、その頃からどもることが時々激しくなり、それに性格も内気で消極的であるということから、母親が心配をして、相談に来られたのです。

Y君は最初の時から砂箱遊びが大変氣に入って、早速箱庭の作品にとりかかりました。

三台砂の上におき、ダンプとブルドーザーを使って箱いっぱいに大きく円を描くようにな道路を作り、その中の左手に山を作りました。それからダンプとブルドーザーは片づけてしまって、「ここはどこ細道じゃ」と口ずさみながら山にトンネルを掘りだしたのですが、なかなか通りません。そこで四方先生も手伝って、二人で歌をうたいながらトンネルを掘りましたが、やがてトンネルが完成するとY君は、「ああ続いた、続いた」と大喚声をあげました。

その後に右手にくぼみを作り、そこを二つに分けたり三つに分けたりして、車を一台と二台別々に入れたりいっしょにしたりしていましたが、そのうちしきりを全部とつて、三台の車を並べて順番に道路を走らせて、ことになりました（写真（）参照）。



かり固められ、上部には二重の扉もつきました。

Y君は「ここは山の下、地面の下で誰もここにいることは知らないの、ここ出口は見えないの、もう一つ外にもドアがあるの、外を通っても行きすぎちゃって見えないの、ここに入つて来た人は皆バアー、死んじやうの」と説明をしました。

Y君はまず魔法の輪のような丸い道路を砂箱いっぱいに作り、その中に山を作りましたが、この山は一体何を意味しているのでしょうか。山は無意識の中から起き上がり始めた大きな問題、育ちいく自我、父親的権威、優れた洞察などのいろいろな意味を持つものですが、ここではY君にとってト屋根をさしかけることになり車は大廻りして右上隅の町に砂をとりに行きます。そして一台が暴走していくぼみに飛び込んだりするので、境を補強する工事がはじまり、右側のくぼみはどんどん掘り下げられてしま

出産といったイメージが思い浮ぶのです。

精神分析家のランクという人によれば、

人間の不安は出産時に暗いぬくもりのある母親の胎内から細い道を通って外界に生まれ出ようとする時から生じるものであると見て、これを出産外傷とよんでいますが、ランクの説はともかくとしても、トンネルなどは母親像と関係があることが多いようです。

それから右手にくぼみを作つて、そこをどんどん掘り下げる工事が進みます。自動車を一台ずつにしたり、二台にしたり、最後に三台並べておいたことは、これから一、二、三、と三台揃つたところで何か新しいことが起ころしらせのようである。前に説明しましたように、三は新しい創造が始まるとダイナミックな数とされています。しかしきくぼみは掘り下げられて、とうとう地面上の死の世界ということになってしまひます。

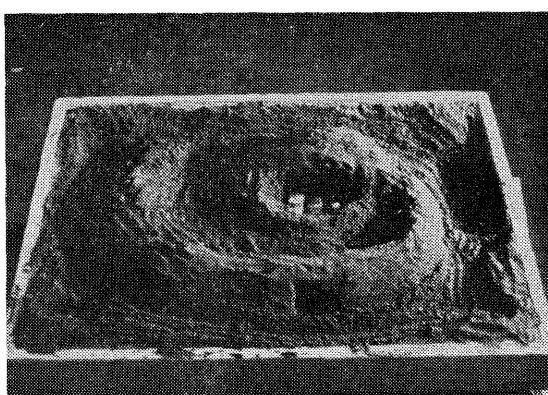
その中にじっとひそんでいる三台の車は、ちょうど冬の間に地面の下で春の芽

期を待つてエネルギーを貯えている植物の種のようです。あるいは母親の胎内で生まれ出る時を待つている胎児といつてもよいでしょう。この作品にはトンネルやくぼみや地下や死の世界であらわされている母親像の象徴がたくさんあります。そしてその

中で眠っている三台の車はこれから育つていく児童の自我とそのエネルギーを示すものでしよう。

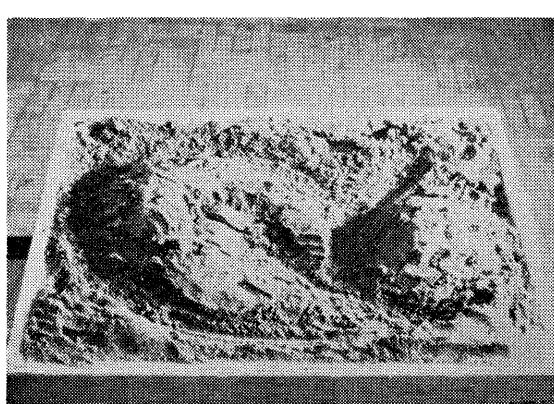
Y君はこの後で丸いビニールのブールをみつけて、水も入れないうちに服のままその中に飛び込んで、しゃがんでブールに浸る真似をしながら、ああいい気持だといつていたそですが、これも無意識の中の母親像の持つ愛情に浸つて安心している気持をあらわした行動のように思えます。

（写真（二）参照）



写 真 (二)

この第二回目の作品は写真を見ていただけばわかると思いますが、どこか女性の子宮を思わせるような構図ではありませんか。そして渦巻状の道がついているあたり、やはり母親像の象徴であると思います。Y君は実際の遊びでも、まだ武器を貯えるだけではなく、砂箱から離れて戦争こっこをしました（写真（三）参照）。



写 真 (三)

次の週に来た時もY君は早速砂箱のところに行つて、今度は真中に山ふところに抱かれているようなくぼみを作り、そこから渦巻状の道を作りました。そして第一回の

動には移りませんでした。

けでかかるこないところを見ると、車は

出たり入ったりしていますが、まだすつかり生まれ出る準備ができているわけではないようです。

第三回目は砂箱の中に戦争ごっここの場面ができました。中央の山のふところに右向きで車が三台、右側には左向きで車が二台、そして他に飛行機が二台ずつ向き合っておかれ、その間に道路がぐるぐるとついでいます（写真（3）参照）。しかしY君は車も飛行機もあまり動かしませんでした。そ

が始まって、銃でそこら中を撃ちまくり、撃たれたものはそのまま動かないで車庫になることになりました。同室していた妹さんや四方先生も撃たれてその場で車庫にさきましたが、四方先生はちょうど足を開いた時に、そのまま車庫にされてしまって、Y君はその足の間に何回も車をバックさせました。

この遊びは偶然にそういう状況になつたのですが、出産、そして死と再生の主題を

の後で部屋中に道を作つてスマール・キング（手動車）に乗つて走りまわる遊びが練り返されました。

第四回目の時には、砂箱には手をふれずにいきなり戦争ごっこになつたのですが、相変わらず武器を並べたり、車に給油をしたり、洗車の真似の遊びをしただけで、実際には戦わずに準備だけで終わりました。

第五回目になって、やっと積極的な遊び

は次のようなものでした。

砂箱の中に日本一の高い山ができました。がまわりは水に囲まれていて誰も近づけないのです。前号に説明した近藤先生の事例

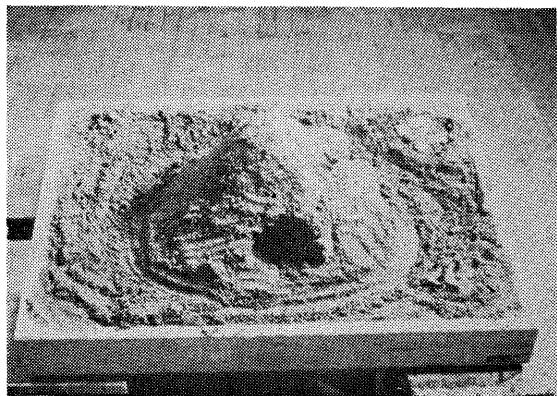
のK君の作った湖の中に生まれた鬼ヶ島のが近づけるようになるのですが、この山はまるで道路を作ります。そしてやつと人山小屋もできますが、そこから上には行かれません。

それからメタルを頂上におきますが、このメタルは悪魔のシンボルとなって山の中に隠されます。そしてメタルを探す悪魔退治が始まり、車をトンネルにつつこんで悪魔探しをします。それから山が大爆発をして、まわりの路も町も家もめちゃくちゃにこわされたことになり、ただ右上隅において、三台の車のところは雪が降ったので助かつて、そのうちの一台がメタルを見つけて

は次のようなものでした。

砂箱の中に日本一の高い山ができました。がまわりは水に囲まれていて誰も近づけないのです。前号に説明した近藤先生の事例のK君の作った湖の中に生まれた鬼ヶ島のが近づけるようになるのですが、この山はまるで道路を作ります。そしてやつと人山小屋もできますが、そこから上には行かれません。

それからメタルを頂上におきますが、このメタルは悪魔のシンボルとなって山の中に隠されます。そしてメタルを探す悪魔退治が始まり、車をトンネルにつつこんで悪魔探しをします。それから山が大爆発をして、まわりの路も町も家もめちゃくちゃにこわされたことになり、ただ右上隅において、三台の車のところは雪が降ったので助かつて、そのうちの一台がメタルを見つけて



登れないような嶮しい山で、メタル探しを行なわれますが、山は大爆発をしてしまいます。心の中の爆発や地震の後ではいつも新しい創造が生まれて、大きな発展が見られるのですが、このような時には情動が激しく動くので、それでY君は大事な三台の車を心の表面に最も近い右上の隅に退避させて、雪をかぶせて冷やしておいたのです。そして爆発の後では、心の最も深いところに三台の車をおきかえて、これから再び出発の準備にとりかかるところでしょう。

第六回目と七回目は前回の箱庭の作品があまり激しいものであった故か、砂箱にはふれないので、戦争ごっこだけをしました。いたのでチャンピオンとなりました(写真四参照)。大爆発で平らになってしまった砂箱の左下隅に、助かった三台の車のために新しく車庫ができました。

さあ、この作品では鬼ヶ島のような恐ろしい悪魔の山ができました。お父さんも

行なわれますが、山は大爆発をしてしまいます。心の中の爆発や地震の後ではいつも新しい創造が生まれて、大きな発展が見られるのですが、このような時には情動が激しく動くので、それでY君は大事な三台の車を心の表面に最も近い右上の隅に退避させて、雪をかぶせて冷やしておいたのです。そして爆発の後では、心の最も深いところに三台の車をおきかえて、これから再び出発の準備にとりかかるところでしょう。

第六回目と七回目は前回の箱庭の作品があまり激しいものであった故か、砂箱にはふれないので、戦争ごっこだけをしました。いたのでチャンピオンとなりました(写真四参照)。大爆発で平らになってしまった砂箱の左下隅に、助かった三台の車のために新しく車庫ができました。

さあ、この作品では鬼ヶ島のような恐ろしい悪魔の山ができました。お父さんも

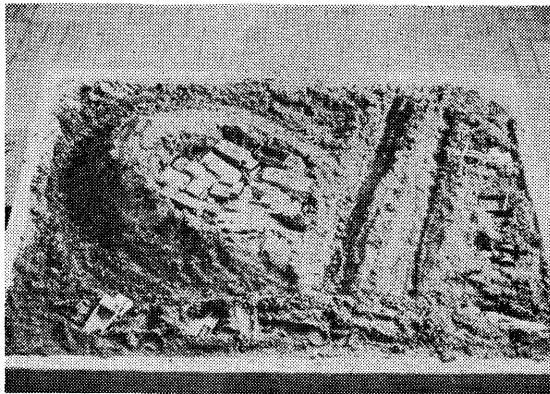
うになりましたが、そのうち四方先生を海に沈めて鯨に喰べさせてしました。

Y君はどうとう自分が土の下にかくっているだけではなくて、四方先生も水の中に沈めてしまいました。前にあげた赤ずきんちゃんも、おばあさんといっしょに狼ノキオのお話でも、最後に人間に生まれ変わる前の冒険は鯨のおなかの中のことです。あつたと思います。

その他聖書ではヨナが三日三晩大きな魚に食べられていた話は有名ですし、アメリカ・インディアンの民話では大きな魚に呑まれて夜の間に西から東に運ばれるというお話もあります。レオ・フロベニウスという人は、これは夕方西の海に沈み、夜の間に海の中で怪獣と戦って、朝東の空から輝やかしく登る朝日を意味するもので、死と再生の主題による英雄誕生の寓話であると解説していますが、Y君はこの頃から

ちょうど自分も鯨のおなかの中にでもいる
ように、水遊びをしたり、濡れた砂でお
だんご作りをしたりシャワーの水を出しつ
ぱなしにして、じめじめした遊びを好むよ
うになります。

第八回目は同室していた妹さんが砂でお



が、未完成のままでやめました（写真④）参
照）。

この作品はちょうど地面の中で発芽を待
つて、逆に数をかぞえてゼロのところから新
しい出発をするところのようです。
見見た時のように、以前には山のふとこ
ろに三台だけおかれていった車、つまり発芽
のエネルギーが、こんなにたくさんに増え
ています。でも工事用の車は半分埋もれて
道路も作りかけのようですから、まだ芽を
出して活躍する時期ではないようです。

第九回目も十回目も、どころかおだん
ご作り、砂箱の洪水遊びなどの水っぽい遊
びが多くて、まだ鯨の胎内から出て来そう
もありません。

第十回目になって、やっと戦争がつこ

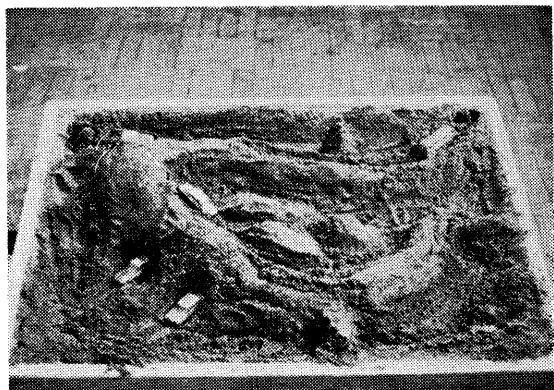
ままごとを始めたので誘われるよう砂箱
に向かって、左手には山のくぼみを作つて
たくさんの自動車を右向きにおき、右手に
は四台の工事用の車を砂の中に埋めるよう
において、その間に道路を二本作りました
が、未完成のままでやめました（写真⑤）参
照）。

どうしてもここでは、四方先生が鯨でも
あり、悪魔でもあり、恐ろしい母親でもあ
るよう、Y君は鯨を殺して海の底に沈め
て、逆に数をかぞえてゼロのところから新

それからつづけて箱庭の作品を作りま
す。まず山に抱かれたような中央のくぼみ
にサーキットを作り、黄色い車を一台勢い
よく走らせました。でもまだ向こう側の車
は壁にしきられてうまく動けません。手前
の車はしきりの中で休んでいます（写真⑥）
参考）。

次に別の砂箱に向かって中央に日本一高
い山を作りました。そのまわりには車が二
台並んで走れる広い道路ができました。そ

で積極的に四方先生の陣地に攻め込み、先
生は死んだことになります。そして床に横
たわっている四方先生に上から水鉄砲で水
をかけ、十から逆に数をかぞえてゼロのと
ころから新しく出発をするところのようです。
た殺す遊びをします。



Y君は砂で濁った砂箱いっぱいにあふれる水を見て「洪水、洪水、牛乳みたいだ」と叫びました。

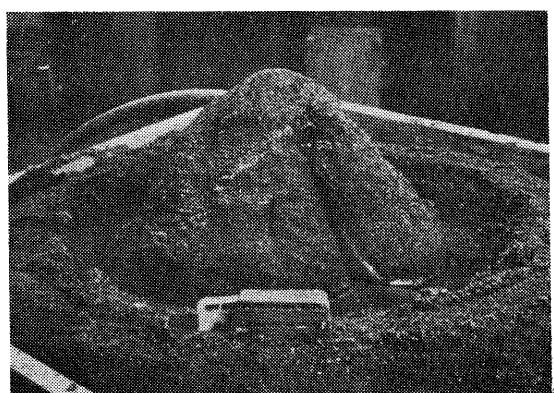
この回はY君は最初から積極的に遊びましたが、箱庭の作品ではまず胎内で胎児が

動き始めたように、山ふところのサーキットの中を一台の車が元気に走りまわり始めました。次には母親像のような山の中に溜っていた無意識のエネルギーが滝となつて放出されて大洪水となります。母親のおつ

ぱいのような水、四方先生によると、この小さな砂箱の中の人工の滝が、千丈の高みから水がしぶきを上げて落ちてきたよう感じられた程、迫力のある光景であったそ

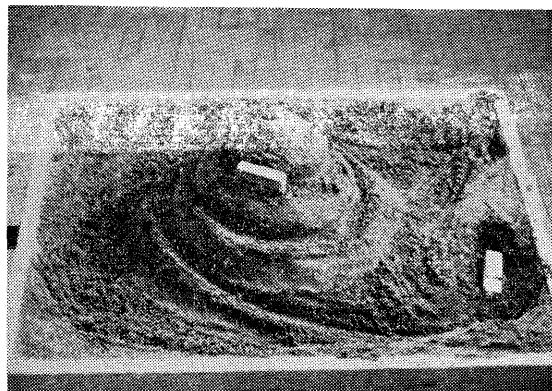
うです（写真七参照）。

ら、水道のホースを反対側から差し込んでから滝を作ろうとしてちょっと考えてから本当に水が流れるようになってしまった。水があるふれて山が崩れそうになるので砂で補強しますが、どうどう山は崩れ落ちてしまいま



線で一気に頂上まで登りました（写真八参考照）。

こうして魔法の山は誰にも登れない山でしたが、上から四方を見下ろせる公園のような楽しい山に変わりました。この新しい山こそ、母親との未分化の世界から独立し



がら砂箱で遊びつづけ、最後には砂箱の中に入つてどんどん足固めをしたりしましたが、相談室に来るようになつてから約半年の後にはすっかり元気な子どもになつて、どもることもなくなり、最終回にはあおきの赤い実を四つ四方先生に記念において去つていきました。

* * *

これまで四回にわたつてサンド・ブレイ

・テクニック（箱庭療法）に関して、實際の治療の過程などに沿つて書いてまいりましたので、だいたいどのようなものであるかわかつていただけたのではないかと思ひます。

児童は夢と幻想の世界、私たちおとなが忘れてしまつたお伽の国に住んで、彼らだけの間で通じる象徴的な遊びや考えの中に魔女退治やゴア・ゴンゴンの遊びをしながら毎日を送っています。

フランスの構造主義を唱えるレビ・シユトロースという人は、未開人の思考は人類の発展の初期の段階にとどまつてゐる幼稚なものであるという今までの進化論的な考え方を棄てて、未開人こそ現代の原子物理学などに必要な発達した象徴的で寓意的な思考法を持つてゐるから、この点でわれわれは未開人に学ぶべきであるといつています。

もちろん児童と未開人とは同じではありません。しかしそちらも無意識の世界に近く住み、無意識の持つ生命力や創造力をあらわす象徴的な表現をするというところは似ています。

この意味で私たちおとなも、これからは児童の行動や遊戯から大いに学ばなければならぬのかもしれません。

(駒沢大学・精神研究所
スイス・ユング・クリニック所員)

幼稚園のある一日



四月

内田和子

一、はじめに

期待と不安に満ちた幼児を迎えて、今年も一年が始まった。つい先日、私のもとから幼児を一年生に送りこんだのであるが、それ以来、待ちに待った新しい幼児を迎え、私自身も新しい期待に胸ふくらませるとともに、一方では、どんな幼児たちがくるのかしらという思いが通りすぎるのである。

両親の愛と保護の中で安心して生活していた幼児がはじめての集団生活にとびこんでくるためには、幼児たちは、まず、自分を受け入れてくれる人を要求しているであろう。そこで、私は、まず教師と幼児のあたたかい心のふれあいを前提にして、一日も早くひとりひとりの幼児が、安定して活動できるように、また、ひとりひとりの幼児が満足して活動できることや、友だちの感情も受け入れてあそべるようになることを念願するとともに、そのために、幼児たちにとって、かけがえのない教師にならねばならないと思うのである。

そこで、四月の幼児の姿を私なりに考えてみた。

- ① 集団の中で安定した気持で活動するようとする。
- ・必要なことばは、自分から教師にいう。
- ・自分から活動に入る気持にする。

② 身のまわりの始末は、自分でできるようにする。

- ・靴の出し入れ

- ・もちものの始末

- ・手洗い、鼻かみ、用便の習慣

③ 集団生活に必要な最小限のきまりを守るようにする。

- ・遊具を友だちと使う。

- ・順番を守る（交代する気持になる）

④ 新しい環境に慣れ、喜びと興味を感じさせる。

つぎに、具体的にある一日について述べてみたいと思う。なお私の学級は五歳児、一年保育、三十三名である。

一、実践例

(1) 月日 四月十四日（火）

(2) 前日の活動

- 朝のあいさつを先生とかわす。
- すきなあそびをみつけて、活動する。

- ブロック・レールセット • ままごと • 粘土 • 絵画
(以上室内活動)

- ボール • チェンネット • 平均台 • 砂あそび (以上戸外活動)

外活動

。みんなで紙芝居『三匹の子豚』を見る。

(3) 本日のねらい

安定感をもって活動する。

(4) 実践

“自分を受けとめのばしてくれる先生がいる”と、張り切って登園してくる幼児にとって、朝の教師との出会いは、その日の活動に大きく影響する。

登園してきた幼児が、安心して自分の生活の中にとりこんでいるように、教師は、ひとりひとりの幼児の要求を直接にふれて判断してやらねばならない。これが朝の幼児との出会いであろう。ある幼児は、教師の身体的接触（頭をなせる、手をとつてやる、だいてやるなど）により親密感を味わい、ある幼児は、教師と目と目があうことで、また、ことばを交わすことで安定し、自分の生活にとりこんでいく構えができるいくのである。それは、幼児の心と教師の心の通じあいであり、心のふれあいでもある。幼稚園の一日は、このようなひとりひとりの幼児との出会いが始まる。

それで、『今日は、どんな楽しい顔をしててくれるかしら』と、自分自身の心をあたたかいものにしながら白紙の気持で幼児の登園を待てるよう自分にいいきかせて、保育室で幼児の登園していくのを待つことにする。

△△・十五▽

まず、H男が走って部屋の中に入ってくる。教師「Hちゃんおはよう、今日は一番早くて、えらかったわね」と、話しかけると、Hは、恥ずかしそうに赤い顔をして、おたより帳をさしだし、服を着替えて行く。少々教師の方が、気負いすぎたのかなと恥ずかしくなる。

「先生おはよう」と、顔面喜びに満ちて、S男とY子が入ってくる。教師もつりこまれて、「おはよう」と、元気よくあいさつをする。

O男は、はつきりときちんといわなくては気がすまぬ、「先生おはようございます」と、ていねいにあいさつをする。これを聞いて、S子やK子も見習つてきちんとあいさつをする。

小さい声でことばをかけてくれるM男、体ごとぶつかつてくるT男、ただだまつて、にこにこ笑っているN子、みんな元気に登園していく。今年の児童たちは、みんな元気というのか、社交的というのか、入園以来、親からはなれず泣いているという状態の児童は、ひとりもない。順番におたより帳をあずかりながら、みんなの顔をみていて、話などしていると、S子は、教師の髪の毛をなぜながら「先生の髪とおかあさんの髪と、どっちが長いかなあと」と、話しかけてくる。「さあ、どっちかな」と、返事をしているうちに、「先生外へ行ってあそんでくるわね」と、安定し

た顔で元気よく園庭へでて行く。

△△・四〇▽

全員が登園をすませ、どうにかあそびだしたようである。S子とN子は、集団生活に慣れにくく情緒不安定で、なかなか自分からとびこんでいくことができないが、教師といつしょなら喜んで活動できるので、どのような活動をするか少しそうすをみることにする。

★レールセット

レールセットは、構成遊具のひとつであり、ひとりでも十分満足してあそぶことができるとともに、そのようなあそびを通して、友だちとの関係も作りやすい遊具である。つまり、児童たちは、自分の感情を満足して安定感をもつとともに、その中で、友だちと接触したいという要求を満足することも、きわめて自然の遊びの中で可能になってくるのである。また、この遊具は、家庭にもあるおもちゃなので、児童たちも気がするに取りくるので、人気がある。S男N男N男W男の四名が登園するとすぐレールセットをもちだしてあそんでいる。

みんなそれぞれに汽車をもち、それぞれがレールを組立ててひとつのかまくでいる。あまり広くない場所なので、すぐ机の上は、レールでいっぱいになり、友だちのとぶつかつてしまふ

が、O男とN男は、そのたびに顔を見合せ、だまつて手を休めている。しかし、S男とW男は、ほがらかな性格のためか「きみとぼくのとつなごうか」「うん」と、話をしながらあそんでいる。教師もN男とN男たちもこの遊具を通じて友だちが作れたらと思、レールをもつて仲間入りをし、「Oちゃんの線路と先生の線路とつないであそばない」と、話しかけると、N男は、だまつて教師のいうとおりつないでいる。「NちゃんもOちゃんのとつないだらどう」と、誘いかけると、O男もだまつてつなぎだす。S男たちも「ぼくらも仲間にれて」と、いつてくる。

教師は、四名が仲よくあそべるように、机の上のレールを整理しながら、ようすをみていると、O男とN男の汽車がぶつかった。ふたりは、にこりと笑い、N男はバックをしていった。S男が「Nちゃんこの鉄橋わたりな。何も通らないよ」と、話しかけている。N男は、うれしそうに、「うん」と、返事をして、汽車を動かしていく。W男「Sちゃん、ここから線路まげてもいい」と、たずねている。

どうやら、四名は、ちょっとした教師の誘いかけから、汽車を通してあそべるようになつたようである。

★ボールあそび

入園以来一週間もたつてるので、幼児たちは、自分たちで自

由に戸外へでるようになつていて、元気のよい女児六名が、外でボールつきをしている。おとなしいW子はボールをだいて立っている。W子は、まだボールにも慣れていないらしく、何とはなくさみしそうである。「Wちゃん、先生とボールのうけあいつこましよう」と、誘いかけると、W子はうれしそうにそばによつてくる。

そこで、W子とふたりで向かい合い、ころがしつこをする。W子は、うれしそうに教師のボールを受けとめて、また、ころがりかえしてくれる。このようすをみた他の幼児たちも教師のもとによってきて、「先生、私ともして」と、それぞれが、自分のもつてきたボールをころがそうとするので、教師といつしょにあそぼうとよってきた幼児の気持はうれしく思つたが、「ちょっとまってね、先生は、ひとりでしょう。だから順番にしましよう」と、いつて、よつてきた幼児たちを少し間をおいて、ひとりずつわらせる。幼児たちは、どうするのかと期待をもつた顔で教師に従つた。「さあ、このボールで、Aちゃんから順番にころがすわよ」と、いつて、A子の方にボールをころがしてやると、他の幼児も受けとめに入つてくる。

まだ、幼児たちは、自分が先生とあそびたいという気持が強いのだなあと思っていると、さっそく幼児たちは、「先生私のボールでしてなあ」と、それぞれ自分のもつたボールでころがしつこ

をしたいとい、順番など無視して、ころがしてくる。

先生といっしょに私のボールであそびたいというすなおな気持がうれしく、幼児の気持を満足させたいと思ったので、しばらくあそんだが、一度に二個や三個のボールがころがつてると、教師もさばききれないし、それぞれの幼児も満足することもできなかつたので、「ねえ、みんなこれではおもしろくないでしよう。ひとつのボールで仲よくあそびましようよ」と、話しかけると、B子D子は、「わたしのボールやで仲間にするのはいや」と、いつて、ボールをかかえて、不満顔で走りだし、少し離れた場所でまりつきをはじめた。せつからく友だちとあそぶ機会を作ったのに、B子やD子は、自分のボールで先生とだけあそびたいという要求が強く、教師の気持を受け入れてくれない。

そこで教師は、このあそびに対して完全にお手あげの形になつたが、この時期には仕方のないこと、幼児たちは教師との一対一の接觸を強くのぞんでいるのである。だから、そのような幼児の感情を大切にしてあげなければいけないと思った。このような感情を教師に示してくれたことに対してもうれしく思ひ、これでいいという満足感もあつた。

しかし、満足のいくまで一对一で要求を入れてあそんであげるべきであることは十分わかっているが、友だちとあそぼうという気持になりはじめた幼児もいるので、やはり教師がいっしょにあ

そんであげないとうまくあそべない。この両方の要求を一度に受けとめることができないので情けなく思う。B子たちは、まりつきをはじめたので心残りはするが、他の幼児とあそぶことにする。入園当初は、よくこのような場面にぶつかり、教師として苦しむのである。

教師とあそびだした四名は、順番にうれしそうにころがしつこをした。この四名は、友だちとあそぶ楽しがわかつてきたらしい。教師は、離れていた幼児たちを気にしながら、ころがしつこをしていると、さつき離れていたB子がボールをもつて、「先生、わたしといっしょにバレーボールしよう」と、いつてきた。「そうね」と受けてから、「Bちゃん、ちょっとまってね」と、いつて、ころがしつこをしている幼児たちに、「あなたたちじょうずになつたわね、今度は、あなたたちでやってごらんなさい」と、いってから、B子とバレーボールをする。

テレビの影響でB子は、いろいろのスタイルを知つていて、今度は、教師と一对一なので満足してあそんでいる。友だち同士であそぶことのできない幼児、また、あそび方がわかれれば友だちと仲よくあそべる幼児と、それそれに違うが、まだお互に結びつきができないために教師に依存的であり、ひとりひとりが教師と自分の遊具であそびたいという強い要求をもつてゐる。この要求を満足させ、大切に育てていけば、やがて、幼児も安定し自信を

もつて友だちと活動するのではないかと思われる。

★平均台でジャンケンあそび

昨日からテラスに二台の平均台が出してあり、昨日も数名の幼児とあそんだのだが、今日もY夫が、昨日のジャンケンあそびでできた新しい友だちのU夫C夫たちと二組に分かれてあそんでいる。勝負の意識は全くなく、友だちといっしょにあそべることが楽しいらしい。負けると自分の好きな方に戻り、また、やつている。見てもとても楽しそうである。もっと友だちをふやして、楽しくあそべるようにと思い、そばでみているK子やS夫を誘つて仲間に入れてもらう。

S子もそばで友だちのあそんでいるのをじっとみつめているので、いっしょにあそびたいのだろうと思い、「Sちゃんも仲間に入らない」と、教師が誘いかけると、S子は、さつさと逃げて部屋の隅の方にいき、すわってうつむいてしまった。S子は、家庭生活しか経験しておらず、近所に友だちもなく、はじめての集団生活に緊張の連続であることをよく知つていながら、急に誘いかげたうかつさを反省するとともに、しばらくS子のようすを見守ることにした。そして、何くわぬ顔でジャンケンあそびを続けた。

「先生、おとなでもジャンケン負けるの」と、教師が負けると

ふしぎそうにたずねてくるN夫に、「そりやおとなつて、子どもだって同じよ」と、返事をすると、にっこりと笑う。元気のいいかけ声に誘われて、四名ほど集まつてみている。友だちのあそんでいるようすを見て、「グーだせ」「ビイだすで負けるのやないか」と、D男は、世話をやき、自分も仲間入りしたつもりで楽しんでいる。幼児もいる。

教師は、この四名のようすを見守りながら、あそび方がよくわかるように少々大げさな動作とことばを使いながらあそび、しばらくしてから、「きみたちも仲間に入れてあげましょうか」と、声をかけると、うれしそうに「うん」と、いって、喜んで仲間入りをする。

S子は、まだ、しゃがんだままじっとして、時々こちらのようすをうかがつていてるようである。やはり、こちらのことが気になつてゐるらしい。やはり、いっしょにあそびたいのだなあと思い、思いきつてS子のところに行き、「いっしょにあそびましょよ」と、S子の手を教師がひいて仲間入りをする。そして、教師の前にS子を入れてみた。他の幼児よりテンポは遅いながら、順番がくるとS子もジャンケンをする。負けたのでどうするのかとみていると、逃げださず自分で一番うしろのところに並んだ。やはり、友だちとあそびたい気持は十分あつたのだなあと教師自身も安心した。負けたN夫が後にきて、S子の前に並んだ。N夫

も全く悪気がなくにこにことしている。S子もだまっている。そこで、Y夫がつぎにうまく並べたので、「Yちゃん、うしろへじようすにならべたわね」とほめてあげると、Y夫も気づいてS子のうしろへ並びなおす。

二回目にS子がジャンケンをした時も負けたが、表情も変えずさつさとうしろに並びに行った。あそび方がわかつてきたのだなと思いつながら、つづけていっしょにあそんでいると、三回目にジャンケンの番がまわってきたS子は、Y夫とあたり、同点でふたりともハサミをだした。Y夫は、「同時や、もう一回しよう」と、S子にいう。つづけて二回も同じなので、S子は、「いつまでもいっしょやわ」と、口をおさえ、体をかがめて笑いだす。「ほんとにおかいわね」と、教師もいっしょに笑うと、Y夫もつられて笑いだす。

ふしきなことに、それから、S子の表情は明るくなり楽しそうにあそんでいる。やっと安定して友だちとあそべるようになった

ようでは、とすると。このあそびは、メンバーがよく交代するが、

S子は、最後までつづけてあそんでいた。

保育室で、ままであそんでいたK子・A子が、「先生、ごちそう

ができましたよ。たべにきてちょうどいい」と、よびにきたので、K子たちのところへいこうとすると、C夫が、「先生は、よばれるとすぐその子のところへいくであかんわ」と、不満をもらす。

C夫に「すぐもどってくるからまつててね」と、いと「いや」と、いう。「それならいっしょにKちゃんのところへいってごちそうにならない」と、いと、「ぼくは、まま」とみたいのきらいやもん」と、いい、「もうやめた」と、いいながら、園庭へ走りだした。

K子たちは、早く早くと手をひっぱって、まま」との方へつれていくこうとする。やはり、C夫にとつてもK子にとつても自分ひとりの先生であつてほしいのである。やはり、ひとりひとりの幼児を十分満足させてあげることがもつとも大切なことであろう。そのためには、毎日毎日が大切であり、その中で次第に、幼児にちもしだいに人間関係を深めていくのではないかと思い、K子にひかれて、まま」との家へ行く。ふたりは、たいへん喜び、粘土で作つたごちそうを「どうぞ、どうぞ」と、いって、すすめてくれる。「おいしそうね」と、いいながら、近くにいたM子も誘つて、ふたりでたべる。

△九・三五△

★映画「つこ

平均台であそんでいたS男とT男は、手洗場でうれしそうに相談をしている。教師もS男とT男が友だちになり、あそびの相談をするようにまでなったことをうれしく思つてみていると、ふた

りは、肩をくんで、「映画するからみにきてください」と、いなながら、テラスのところを歩いている。「何をするのや」と、R男がよつていく。「タイガーマスク」と、S男が答える。三名は、保育室に入り、「早く椅子ならべよう」と、S男の発言でR男を含めて三名で椅子をならべだす。これを見て女兒三名がその椅子にすわりこむ。

S男たちは、お客様の少ないのにも気にせず「さあ、はじめよう」と、話し合っている。教師は、どのようにしてあそぶのかと興味も手伝いお客様になりすわりこむ。T男「ぼくは、タイガーマスクになるわな」と、いうと、S男は「ぼくは、ジャガーさ」と、話をしながら廊下にてていく。そして、うれしそうな恥ずかしそうな顔を廊下からだして、お客様の方をみている。

教師は、「もうはじまりますか」と、たずねると、それにつられて、T男「先生、オルガンひいて、はじめるで」と、いう。「何のうたをひくの」と、たずねると「何でもいいわ」と、返事をするので、タイガーマスクの歌を知らないことを残念に思ひながらマーチをひと、ふたりは、緊張した顔で入場してくる。そして、お客様の前でプロレスをはじめる。

教師は、床の上ではあぶないと思い、マットを二枚もつてきて、「この上ですると本物みたいでしょ。ころんでもいたくないわよ」と、いうと、S男「ちょうどいいなあ」と、すぐに受け

入れてくれた。お客様の幼児が「どっちがどっちかわからんわ」と、いう。T男「ぼくがタイガーで、Sちゃんがジャガーです」と、説明する。すると、「タイガーがんばれ」「ジャガーまけろ」と、応援をはじめる。このさわぎにだんだん幼児たちも集まってくる。S男たちは、人に見せるというよりむしろ自分たちで楽しんでいるようである。

T子N子らの六名の女兒が「先生、わたしもやらせて」と、いってくる。「そうね、何をしてみせてくれるの」と、たずねると、「アタック・ナンバーワン」と、T子が答える。「では、Sちゃんたちのつぎね。ちょっとまとめててね」と、いうと、六名は、S男たちがしたようにいそいで廊下にてていき、はしゃいで待っている。

S男たちも十分たのしんでから、教師が、S男たちに「Nちゃんたちにも交代してあげてね」と、いうと、「うん」と、答え、「先生オルガンひいて、退場や」と、いう。そこで、オルガンをひいてあげると、二名は堂々と退場していく。つづいて、六名の女兒がお客様の前に立った。すると、A子S子K子の三名は、「はずかしいわ、先生わたしたち歌をうたうのにするわ」という。「そう、では、バレーのつきにしてね」と、いうと、廊下のところへ戻って行く。残りの三名は、二組に分かれ、「それ」「はい」「はい」「ファイト」などとかけ声をかけ、バレーボー

ルのまねをしている。みている幼児も「ファイト」と、声援を送っている。

戸外あそびをしていた幼児たちも十分それぞれの活動に満足したのか、みんなこの活動をみに集まってきた。

教師は、この活動をみんなで楽しみたいと思い、司会の役になり、「では、つぎにKちゃんたちどうぞ」と、いうと、三名は、手をつないでチュウリップのうたをうたつた。「おじょうずでしたね」と、ほめてあげると「今度は、ぼくにさせて」などと元気のよい者がでてきてうたつてくれる。お客さまの中でこの活動に興味がなくなった者もでて、ざわざわしてきたので、今度は、学級全体でする身体を動かす活動へと切り替えた。

△一〇・〇五▽

★リズムあそび

「今度は、みんなでタイガーマスクやアタック・ナンバーワンになつて歩いてみましよう」と、教師が誘いかけ、みんながすわっている椅子を円形におきかえた。これは、幼児たちが情緒的にもまだ不安定のため、大きな円を作つてもすぐ中心によつてしまつて、十分身体を動かして歩けないので、椅子で円形を作り、

その囲りを歩かせることにより、のびのびと動作させるためである。

「さあ、タイガーマスクになつて元気よく入場しましょう」

と、いうと、みんな元気よく歩きはじめた。しかし、まだ、不慣れのため前の幼児にくつついたり、前があきすぎたり、全体の調子は、なかなかそろわないが、いつしょうけんめい曲に合わせて身体を動かそうとする態度がよくわかる。

学級全体でのリズム活動は、緊張が伴うので気分をやわらげるために、ゲームをすることにした。そして、その中で新しい友だちをできたら作つてあげたいと考えた。

それは、円の中央に椅子を一脚おき、周囲に幼児数より一脚おりないだけの椅子を用意し、曲に合わせて歩き、曲が止まるときで椅子にすわる。しかし、一名すわることができないので、その幼児は、中央の椅子にすわり、それを繰り返し行なつては交代するというあそびである。このゲームを通して、機敏に動作できる者や、まだ、学級全体で活動しているという感じがつかめない幼児、ただうれしくて、キヤーと声をだして喜んでいる幼児などさまざまであるが、学級全体の活動の楽しさをしだいに感じとっているようである。

△一〇・一五▽

★帰宅の準備をする

降園の時もほとんどの幼児は教師の手を借りなくとも自分のことは自分でできるようになつた。作業着をR男は、くるくるとま

るめて、ロッカーに入れている。そこで、教師が「Rちゃん、作業着は、こうしてたたんでしまうのよ。くしゃくしゃにならないでしよう」と、両そでを合わせてから折りたたむように、たたんで見せてあげると、そばで、やはりまるめてしまっていたH男もロッカーから出して、きちんとやりなおしている。幼児は具体的な行動の場で、他人の行動をみながら、学習していくているようである。帰宅準備をするのに個人差があり早い者と遅い者では、七、八分も違うので、ぱつぱつそろえていきたい。

△一〇・三〇▽

★降園

ジャングケンあそびの時いったC夫のことばが、まだ、頭の中にひつかかり、C夫を先頭にして、教師と手をつないで帰る。

三、反省

今日も一日幼児の状態をおいかけて、あちこちと話をしかけたり、手をつないでいっしょに仲間入りをしてあそんだり、いつしょに作ったり、たいへん忙しい一日をすごしたが、果たして教師自身から幼児の中などびこんで、幼児の心をとらえることができたのかと疑問が残る。

「先生は、よばれるとすぐその子のところへいくであかんわ」といったC夫の気持が、深く胸に残る。入園して、今日で八日目、まだまだ“先生といつしょにあそんでほしい”という要求も強い幼児たちである。そのひとりひとりの感情を時間をかけて満足させてやれば、幼児たちも安定して、友だともあそぶようになるであろう。そのためにも時間と空間を十分にとった一日の生活リズムの繰り返しが安定する必要があろうし、その中で教師と幼児の心のつながり、お互同士の信頼関係がより深められていくよう努力すべきであると思つた。

また、入園してまもないためか、幼児たちの活動の中に、ウォーミング・アップの時間が特別に長くいろいろな活動へよく変る。幼児、また、逆にじっとひとつの活動にしがみついていることで安定感を求めている幼児などいろいろあるが、やはり、本当に自分で選んだ活動のできるように、教師も時間をかけて努力していく必要がある。もちろん活動のしかたのわからないこと、環境になじみにくいこと、友だち関係がうまくいかないことがその原因と考えられるが、教師として、このような幼児のひとりひとりの状態をよく把握して、いろいろの活動ができるよう、十分の準備がなされねばならない。

やがて、幼児自身が、自ら活動する日のためにがんばらねばならないと思つた。

幼稚園教育 九十年史



多田 鉄雄

本書は昭和四十一年がわが国幼稚園教育九十年に当たるので、文部省がその記念事業のひとつとして同年度中に刊行する予定のものであった。しかし資料の収集・執筆監修に予期以上の日時がかかり、ようやく昨年九月になって刊行された。

文部省はこれまで学制何十年史とか実業教育何十年史とか、そのほか種々の年史を編集刊行して来たが、幼稚園の年史はこれが初めての試みであった。

本書はその編集後記にあるように、編集方針・方法など、その根幹を決める、

文部省首腦部を中心とする十五名の編集者と、実際に執筆する十八名の執筆者と、更に資料の収集に当たつたり、多数の執筆者によって書かれた原稿の精粗を調整したりする文部省初中局初等教育課長および課員十六名より成る編集事務担当官の三者によって完成されたものである。実は筆者も編集企画にも参画したほか、執筆者の一人として相当部分を担

当執筆したものである。その点でこの書評はあるいは第三者的立場が確立していない心配もある一方、内部的な事情に通じての利もあるといえるであろう。

本書は制度、普及、教育課程と指導法、教職員、施設設備の五つの章と、四五百頁を超える資料編から成り立っている。本文の各章はそれぞれその章のテーマの専門家が分担執筆し、資料編は九十年史年表をも含めてほとんどが編集事務担当官が編集したものである。

本書の特色はこのように執筆者がそれぞれその専門分野を分担し、さらに統一的に調整されている点で、個人の著作には見られぬ強味を持っていることが一つ、第二は文部省が各都道府県の教育委員会を通じて一方ならぬ苦心で可能な限りの資料を収集し、各執筆者の資料とあわせて、これを本文にも取り入れていることである。このような収集は個人では到底なしとげ得ない事柄である。

もともと歴史的に見て、幼稚園教育の重要性は長い間一般には認められず、特に旧い資料は散逸されてしまったものが多く、極く一部の人々によってその若干が保存されて来たにすぎなかつた。わが国で初めて昭和九年に倉橋惣三、新庄よしこの両氏によつて著された「日本幼稚園史」も、「資料の収集が難かしく」わが国の最初の幼稚園であるお茶の水女子大学付属幼稚園を中心としているようになつていて、「幼稚園史と称して実は幼稚園発祥史の観がある」(同書、序)と述べてゐるのは右のことを裏書きしているのである。その上、大戦による戦災で埋もれていた資料がさらに消滅したと考えられる。たとえば明治十一年の関信三の「幼稚園創立法」は前記「日本幼稚園史」においては「この書は何處にも現在せず、どういう内容を有つものかは今明らかでない」としているが、本書の資料編ではこれを採録しており、その出典

は「文部省教育雑誌、明治十一年十二月号」としているが、筆者は昭和十三年ごろわが国で二番目に創設された鹿児島女子師範付属幼稚園で古い文献の中から筆で書かれた「幼稚園創立法」を発見し、それを筆写して保存している。これはこの論稿が前記の雑誌にのつただけのものか、独立の書として刊行されたものであつたかを検証するための重要な資料であるにもかかわらず、戦災で同幼稚園は焼失してしまつたのである。

このように本書は各専門家の共同労作であるほか、恐らく残存する資料はほとんどすべてを収集したともいえ、他の追隨をゆるさぬ豊富な資料のもとで作成された点で極めてユニークな書といえる。

一方、これまでの文部省のかかる年史は極めて味気ない、いわば記録の羅列の感がするものばかりであったが、本書は少なくともその点ではるかに豊かな内容を持つてゐる。望を得て蜀を望めば、原稿、資料など予算などの関係で除去された部分が、何かの機会に他の方法で刊行されることである。

は全くことの出来ぬ参考の書といえる。

ただ本書が官庁の刊行物である点に、かかる種類のものに共通な弱点があることは否み難い。すなわち国の政策・行政にとつて鋭い批判になる点はこれを取り上げないように編集されていることである。

さらに予算とか他の刊行物とのバランスとかの制約によつて、執筆者の原稿のかなりの部分が要約され縮められ除去されている。それにしても七八二頁に及ぶ大部のものが刊行されたことは文部省関係官の大きな努力の結果であると見るべきであろう。

一方、これまでの文部省のかかる年史は極めて味気ない、いわば記録の羅列の感がするものばかりであったが、本書は少なくともその点ではるかに豊かな内容を持つてゐる。望を得て蜀を望めば、原稿、資料など予算などの関係で除去された部分が、何かの機会に他の方法で刊行されることである。

愛珠

想い出するままに

(十三)

中村道子



一 遊戯室の柱の傾斜がわかり修理する

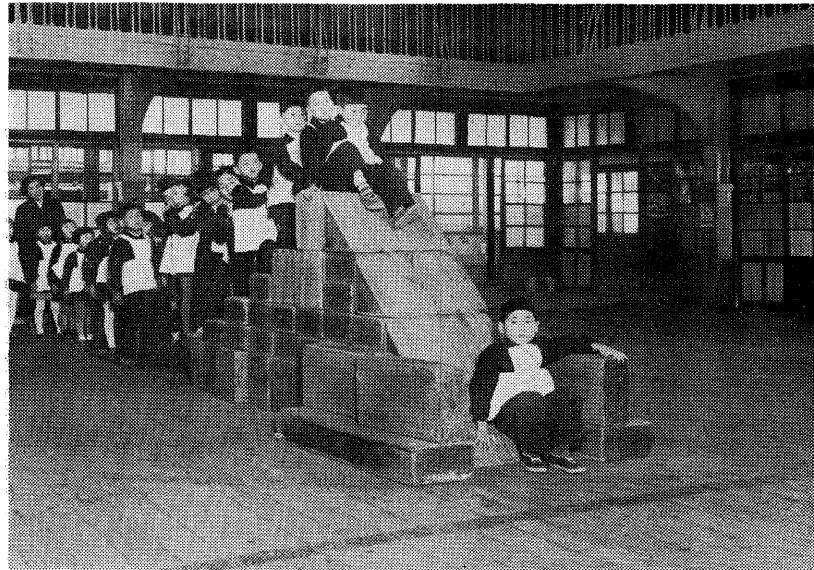
想い起こせば昭和二十四年の七月の中旬、たいそう暑い日であった。どうぞやと大きい男生徒が五、六人来園したので、驚いて尋ねると、「僕らは都島工業高等学校の生徒ですが、市役所の建築課の依頼を受けて、夏休みを利用して実習のために、愛珠幼稚園の校舎の破損箇所を調査してほしいといわれてきました。それでこの調査の報告をし、よくないところは許可を受けて、できるだけ完全に修理するように、学校からも命令されて来ました」と、いったので、これを聞いた私は安心して、「それはご苦労で

ぴちぴちした、飾気のない、この若鮎のような人たちの仕事を、どんどんはかどった。そうしてこの結果、私には気がつかなかつたが、さすがに専門だけあって、広い遊戯室の柱が六本と、その頃職員室にしていた、昔の資料室の東側の柱も、二本が少し傾斜しているとのことであつて、早く気がついて良かったと報告された。そしてこれと同時に、職員室の土台になる根太に修理の必要があることもわかつたので、それぞれ機械を使用して、一週間余りかけて完全に修理してもらつた。

二 遊戯室前方の床板の一部を修理する

そしてこの手序に、これも子どもらが好んで遊ぶ道具の大積木を、平常は遊戯室の正面窓側に積み上げていて、そのままこの場から各自が遊びを進めていたので、自然にその場の床板が痛んで

てちょうどいい」と、頼んだ。



大積木でスペリ台を合作（遊戯室で）

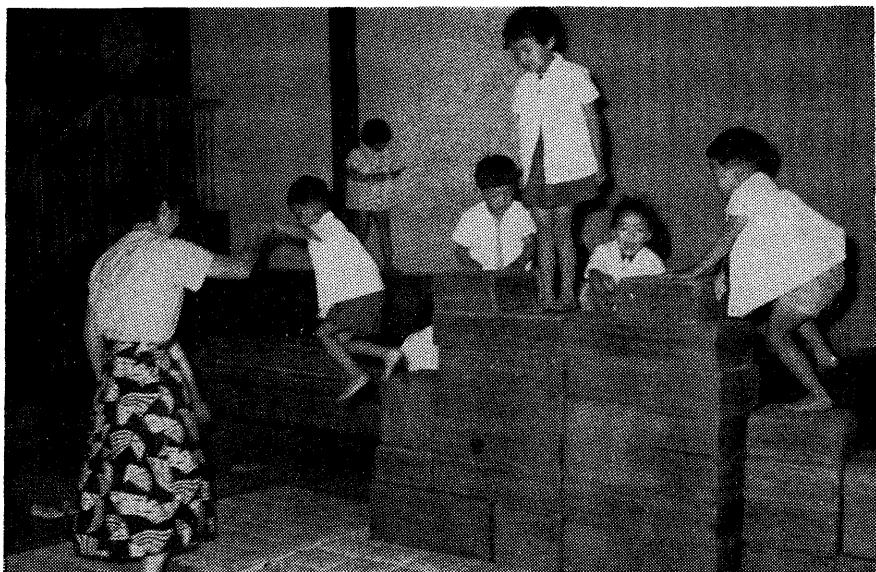
来るから、そのために板が荒れて刺が立つてはよくないと思い、約五坪程床板を張り替えることにした。

この仕事が始まって暫くした時、手伝さんと私が呼びに来たので、行って見て驚いた。それは六十坪もあるという、この広い遊戯室で、床の響の無いのを不審に思っていたが、謹なるかな、広いこの室内の床は二重張りになつていて、二枚の間に三寸程の空間を作り、この空間におが屑をぎっしり詰めていたから、おおぜいの子どもらが飛んでも躍ねても、足音の響の無いのは道理であると思つた。

愛珠の建築には、このように人の目につかぬ所まで、入念であつたのである。

今日まで私が受けたこうした無言の教えは、数々あつたが、今度もまた、遊戯室の床にこれを見せられて、また敬服したことであつた。

今度の修繕は家屋にとつては大切な根本的なもので、仮令少々の傾斜でも、捨てて置けば大きくなるものを、それを小さい今のうちに、場所は変わっていても、あちこちに八本もの多い柱と、職員室の根太が、鉄の機械でぐつとあのよう縛めて、これでこそよいといわれるまでに、直したことは嬉しくてほつとした。それに遊戯室の床の二重張りには、感激以上の感謝があつたのである。



高飛びあそび（遊戯室で）

三 遊戯室の東側に納屋を作成する

今回の修繕の結果、私は拍車をかけられたように、以前計画したことのある、遊戯室の東側に納屋を作成することに決めたのである。

それは、こここの窓から、隣の会社との仕切までの間は約一間あつて、長さが窓六個すなわち六間と、窓全部を挟むように、南と北の二カ所に二階へ上がる途中の踊場が二個あるから二間増し、その上に、玄関の二間幅廊下の外側に沿って、半坪の空間が二つ統いでいるので、合計十坪の空地があることになるから、これを地価の高い北浜で遊ばせることは、無駄だと思っていたから、今回実施は非常に嬉しかったのである。

早速実行にかかり、ここにあった遊動円木を毀つて、この跡を漆喰で地ならしをし、屋根や扉を造作して、細長い納屋が出来上がつた。倉庫の地下室が狭くなつた現在、ここを補いにして、大型の雑具や、椅子のような長い物を片附けると同時に、人ひとり通行出来るほどに空け、職員室と使丁室が直通出来るようになつたので、非常に便利になり、能率が余程違つて効果が上がつた。

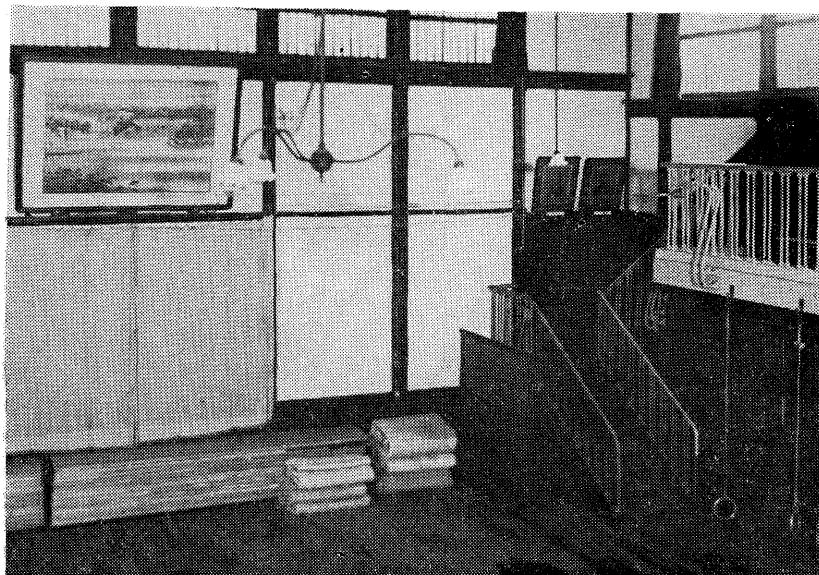
職員は皆大喜びで、「裏街道を行くととても早い！」といつて、往來は繁く繁昌するので、今度の造作は誰にも喜ばれるから私は嬉しいと思つた。

四 遊戯室の壁にスクリーンを特設す

納屋が出来上がったことは大層嬉しかったが、その内部や、棟木などが、判然遊戯室から見えて見苦しいので、保健室の時のように、壁に塗潰して、その中央にスクリーンを特設しようと決心した。こうした時でないと、わざわざ出来難いと思い、よい機会を得たと嬉しく思った。

早速仕事にかかり、天井の直ぐ下にある採光用の大きい窓は、そのままとし、それに続く白壁もこのままにして、それに統いてまた下にある硝子障子の欄間と、戸締用の一間の大きい硝子窓は、皆壁に塗替えてしまつたのである。壁の色は全部白に近い薄いクリーム色にし、中央にあつた窓の二つ分を、スクリーンに特設されたのである。

以前、明治の末期の頃、稲葉園長は時代に即応して幻燈や映画を時々幼児らにも観覧させられたと、その頃就職していた人たちから聞いていたから、これらの設備は同園長によつてせられたものと思うが、今回天井につけてあつた二つの滑車は取外され、採光用の窓や、戸障子を覆つた暗幕もたくさんあつたが、随分古くなつていたから、これらの備品や操作用の品々も廃して、室内の改装を機会に、P.T.A会員の方々の好意によって新調せられて寄贈され、その後は安心して、楽しく映画会を開催することが出来



遊戯室の壁（正面の幕の中はスクリーン）

たのである。

また隣の会社は五階の洋館であったから、三階までは、時にこれららの動きが見えることもあつたが、これも今回解消されたのである。そして室内の明暗について、少々案じたが、これとて取立て感じず、却つて落着きが生じ、子どもの注意も集中しやすくなり、遊戯室と兼用の講堂が出来て結構であつたと感謝した。

五 使丁室の改装

なお、通り抜けの納屋に使丁室の方からはいる入口は、二間廊下の壁を打ち抜いたので、この右横に続けて建てられていた。建設当時からの下駄、傘置場で、十一坪の広さがあつて、磨きをかけた御影石が美しく敷詰められていた。そしてここ腰板には、細い枠が取着けて、体裁よく白壁の下に、填込みになつていて。幅が一間あってこれをずっと上に上げると、中は全部履物入れで、整然と一つ一つの箱に仕切つてあつたが、随分古くかつ乱暴に扱つたらしく、あちこち破損されていて、今後何にも使えそうにないから清掃後腰板を打着けて、大きい石畳のみ全部漆喰代わりにして台所に改装した。硝子障子で仕切られている。昔の供待部屋は、現在は校務員専用になり、これもまた便利なよい小使室に変わつた。

やがてまた、PTA会員の料理講習会も開催され、お役に立つ

ことだろう。

六 国旗掲揚の許可を軍政府より受く

昭和二十四年一月元旦を迎えた日、軍政府から「今日以後は無制限に国旗の掲揚を許可する」という通牒のあつたことを、市教委の通牒で知つた私は、久しぶりに日の丸の国旗が正門で翩翩とひるがえる姿を想像して、感慨無量であった。

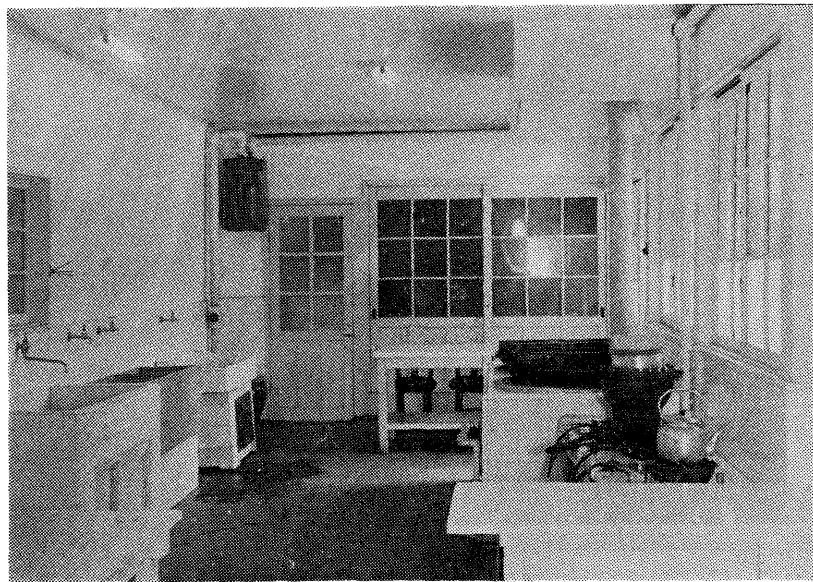
それに来年の六月一日には、愛珠も創立七十年記念日を迎えるのだから、この日には、ここ門頭に国旗を立てることが出来ると思うと、実に嬉しかつた。この喜びは、生死を越えて、日本國中の人たちの努力のおかげであると思うと、思わず声が出て「ありがとうございます」と、何度もひとりごとをいつた。

今はその準備として、この日を迎えるために、園舎のあちこちの修理や改築に心がけるとともに、予算のこともあり、一層心を碎き、そして引締めて、心遣いをしていたのである。

七 常に保育の内容に心を砕く

豊かな内容を持つ保育を実施するには、それに伴つて、最大限の形式を考慮せねばならぬと、常に念頭に置いて、日々保育を実施していた。

そのため昨今のような折柄に在つても、私たち保母は、保育内



改 装 の 使 丁 室



使 丁 室 で 日 本 料 理 の 講 習 を う け る

容の進展に關しては、疎にせず、各自の研修に努力を惜しまなかつたのである。理論のみならず実地の上にも、また看護上からも、骨惜しみをする者は誰もなく、皆よく励んで樂しんでいた。こうした心構えで、日々勤務して下さる保母さんたちの熱心に、私は心から感謝して、その幸福を祈らずにおれなかつた。實際、愛珠には良い先生が揃つていて、大きい声ではいえないが、私は誇りにさえ思つて大切にした。

八 保母採用の苦労

学校勤務の人たちの中で、幼稚園勤務を希望している人を、予め知つて人柄を調査して置き、愛珠に榮転あるいは、結婚退職者のある時には、以前調べて置いた人の中から選び、この人の勤務先の校長に、愛珠への転出を頼むと、仲々許可は得られなくて、却つて難問題がついて来た。例えば先方の校長は「本人が幼稚園を志望するなら許可をしても良いが、後任が容易でないから、今学期待つてもらいたい」とか、「後任を二人出してほしい」とか、附帯事務がついて困つたが、良教師を得るなれば、容易に許可が得られないことは当然であつて、当方も根気よく待ち、各々希望を揃えて提出し、不自由があつても、忍んで待つた。

ようやく着任して顔を見せて貰つた先生は、学校の教育と幼稚園での教育は、対象が違うだけに、その方法や態度も変えねばな

らず、この生活に馴れるまで、ある時期までは可哀想な程努力しているから、慰めたり、励ましたりして同情し、その間当方もなお不自由を忍ぶが、これは時期の問題で、そのうち流石に時を重ねるに従つて、良い保育が出来るようになり、事務方面も手落ちなく片附けることができるから、例え種々な苦労をしても、甲斐があつたと満足していた。そしてその特長を生かして何でも安心して任せられたのである。

人事間の諸問題は何事によらず複雑で、簡単にはか取らないものだから、互に失敗のないように注意し合つていたから、職員間は円満であった。

ある体育課長が所用で来園せられた時、保母たちの大笑の声が聞こえて來たので、「こここの先生の声ですか」と、尋ねられたから「はい」と返事すると、「これは珍しい!! 幼稚園でみんなに笑うことが時々ありますか」と、また尋ねられたから「何時も、あんな調子ですが——」と、いうと、先生は大変喜ばれ、「届託なく、みんなに笑えるのは、幼稚園では珍しくて結構です。私はあの声を聞いて、ほんとに嬉しいでした。僕はお礼に、何か歌を歌つて聞いてもらいますわ——、用事がすんだらここへ、皆に来て貰つて下さい」と、いわれたから、この由を皆に伝えた。

課長も嬉しそうに、京大の校歌を聞かせて下さったので、皆はにこにこ謹聽し、終わった時には、一同は強く拍手して喜んだ。

Young Children

the Journal of the Association
for the Education of young children

Vol. 24 No. 6 1969—9

本号の掲載論文は、①低所得家庭の子どもたちの就学前教育（Head Start）に関するもの、②言語学習に関するもの、③子どもが主体的に展開した遊びの逸話的報告に大別される。

就学前教育が普及し、改良されていくに従って、子どもたちはどのくらい自由遊びをしたがっているか、学習への動機づけは友だちの中から起るのだろうか、組織化された学習活動は子どもたちを退屈させるだろうか、作業を続けさせるために教師たちはただほめていればよいのであろうか、という疑問が増大してきた。リリアン・G・カットはこの点に着目して、「Head Start 学級の子どもと教師」について、伝統的アプローチ（子どもは、教師に暖かく受け入れられる、こと、自発的な遊びなどを重視する立場）と実験的アプローチ（教師が子どもの活動を計画し社会的学習理論に則つて、賞讃、承認、物質の報酬等によつて、計画の遂行を強化し教育効果を高め

ようとする立場）の比較検討を行なつてゐる。両群の教師の行動観察、子どもの行動観察の結果から（“実験的”クラスはつくられていなかつたため、当初の比較検討の意図は達せられなかつたが）就学前教育の研究において、方法やアプローチの違いよりも教師のタイプの違いが大きな意義をもつことが示された。ここでカットは、教師の行動に関する研究あるいは教師と子どものタイプの最も有効な関連についての研究が今後に期待される課題であることを指摘している。さらにつきこの実験の発想に、ハントの「マッチ（match）」の概念を引用しており、子どもが十分に豊かな環境で、自分の興味を維持するためには、新しい情報を得ることが必要であり、それを楽しみ学ぼうとする欲求も共に強められ増大すること、換言するならば、外から報酬を与えられたり強化されるばかりでなく自分自身の内部で、情報過程や探索欲求が報酬をうけ満たされていることが必要であること

を説いている。ベルナイス・S・シェルトンは「アラスカでの Head Start」のタイトルで、一九六七と一九六八年の実態を、とくに基金が打ちきられてからの運営に焦点をあてて報告している。

また、乳児の家庭教育についてジョオニリスティブナウラは「乳児の教育——ある生活共同体の企画——」を報告している。この企画は、ごく幼い時期に知的な環境に置かれることは、その子の後の学習能力に影響を与えるとの前提で、一九六〇年にメリーランド州のモントゴメリーとプリンスリージョージ地方ではじめられたものであり、黒人街に住む親子の教育上のハンディキャップをなくすことを目的に、より豊かな階層（白人）の婦人がボランティアの家庭教師として在宅指導に当った。このような教育の基礎とされるのは、家庭教師が訪問して指導する際における子どもと家庭教師の受容的態度であるが、子どもは時として両親の感情を汲みとりやすく、両親が家庭教師

を快く思っていないと、受容的関係は成立しにくい。それ故この企てがうまくいくためには、子どもと家庭教師だけが別々の部屋で勉強するのではなく、両親もきょうだいも友だちも共にそこにいてその

子と家庭教師がしていることについて理解してもらうのがよく、そうすることによって、母親はこの運動に关心を寄せるようになり、現在では彼女たち自身も訓練を受けて実際に家庭教師として活動するに至っていることを報告している。

言語学習に関しては、この乳児の家庭教育が、ことばの発達を主要目的としている他に、ケルビン・リシーフ・アートの「二つの就学前プログラムにおける言語表現的相互作用の比較」と、セリア・リバテリーの「言語学習への接近」がある。前者は、就学前教育のあり方に、①組織立てないでその場に応じてやつていく方法と、②きちんと計画されたとおりに行なう方法があることを指摘し、双方が教師と子どもの間の言語表現的な相

互関係にどのような差異を生じさせるか、について仮説検証を行なっている。

また、方法①は時間、空間、関係、連続、分類などの概念に焦点をあてていることから、これを「認識的プログラム」とし、方法②は遊びや歌よりも標準語の文法型を用い、数を数え、声を出して読めるようになることに目標がおかれ、授業は教師の質問に答えることによって急速に進められることから、これは「言語的プログラム」と区別された。

両群は六回の二〇～三〇分間にわたる集団（五～十五名）討議での言語関係をオスカー（OSCAR）の分類基準に従って記録され、結果が検定されたが、オスカーベースをこの実験に引用することの信頼性についての研究がまだなされていないことが判明した。もっと緻密な実験であつたら差異が得られたかもしれないが、彼はこの結果をスタンフォード・ビネーの得点変化と比較して、認識的プログラムと言語的プログラムの差異よりも、む

しる就学前教育を受けたか受けないと
いうことの影響の方が大きい、と見なし
たほうがよさそうであると述べている。

後者は、言語発達と言語学習の研究に
付随する様々な問題についての論評であ
る。著者のラバティリーは基本的には「言
語学習の能力は人間に非常に深く根ざし
たものなので、たとえ劇的なハンディキ
ップに直面しても、子どもは言語を学
習していく」との姿勢で、社会経済的に
不利な背景を負っている子どもの研究に
ついて述べている。たとえば、「feet」と
いうべきものを“toes”と書うとして
も、「その誤りは彼らが複数形を作る規
則の一つについての知識をすでに獲得し
ている」と示している。彼はすべての
場合についてまだ知っていないにすぎな
い」また、言語は学校教育の媒介物である
と見なすと、不足している分がハンディ
キップとして考えられるが、「美しい」
に相当する同義語を五つ知らなくても
“He done it”と言つても何ら学校での

学習の妨げにはならない。むしろもっと
妨げになることは、（次第に確信されつ
つあるのだが）学校が要求することに出
会つて、社会経済的に不利な立場の子ど
もは言語を使用する能力に欠けていると
思い込むことである。つまり彼は認識的
な要求に出会つて、言語をどのように用
いるか知らないだけなのに。シカゴ大学
早期教育研究センターでのヘスビシップ
マン（1968）の研究等を引用して、この
主張に根拠を与えていた。

ラバティリーはさらに、言語と論理的思
考は「相互に関連しあつてある」という
ヴィゴツキーの主張を前提に、原因結果
の論理的思考の発達と言語の発達に関し
てはピアジェの最近（1967）の研究を引
用し、おとなのみなをする（Patterned
drill）ことによって幼稚園でのリズムや
お答えの学習よりもずっと効果的に、言
語と思考の過程が影響を受けることをベ
レイターとエンゲルマンの（1967）報告
から明らかにしている。また、言語遊び

が論理的能力の発達を培うこと、言語遊
びが言語訓練の意味をもつ場合等につい
て述べ、最後に否定的概念の発達に関する
研究を紹介している。

第三の分類の報告には、ラザー・W・
フラガード・ジェシー・M・ゾラの「子ど
もたちによって計画された部屋」とウイ
リアム・タイラーの「タイヤ遊び」があ
る。我々は「子ども中心」の考えに則つ
て出発するけれども、一体「子ども中
心」とはどういうことであろうか。この
問いかけを部屋の整頓の問題に結びつけ
て、子どもが自分たちの部屋の構成に参
加したことが、子どもたちにどういう変
化をもたらしたかについて記述したもの
が前者であり、後者は自動車のタイヤの
内部の柔らかいゴム管が、興味深く飽く
ことのない遊具であるばかりでなく、肢
体不自由児にとっては、適用範囲が極め
て多岐な療育器具（筋肉運動の訓練が遊
びを通して可能）としての価値をもつこ
とを楽しく報告している。（飽田典子）

幼稚園の生活

記録を中心にして

幼稚園の子どもの日常生活の中には、学ぶこと、おもしろいこと、考へてみるとことなどがたくさんあります。ここに、幼稚園での生活のひとコマの記録をとり、子どもについて考へてみたいと思います。

・他の子にすらっとギンナンをあげるのに、T子は、Mがもつているのを見つけると、Mからとりかえす。)

園庭のはずれにある山の上に、ハチを見にいっておりてきた五人の女の子のグループ。

山で四、五本のタンポポを摘んできたA子。

A子「だれかにだれかにこれあげる」とタンポポをかざす。
「ハーハー」と口々に手をあげる。

A子「T子ちゃんにあげる」T子もらう。

A子・T子「ねー」とこしをおり、顔を見合せ同意する。

A子「だれかにだれかにこれあげる」

「ハーハー」B子がもらう。

T子「だれかにだれかにギンナンひとつあげる」山の上にいた時から持っている黒ずんだギンナンをかざす。

一、もののあげっこ

(・タンボボの花、ギンナンをまわりの子にあげる。

記録

・日 時 昭和四十五年五月十一日

十時二十五分より約三十分間

・場 所 お茶の水女子大学附属幼稚園

・対象児 三年保育四歳児のT子(女兒)とM(男兒)の二人

の関係を中心にして。

「ハーハー」C子がもらう。

C子から黒いギンナンをもらつてゐるMを見て、

T子「それ、わたしのだからちょうだい」といつてとり、手の中ににぎりこむ。

I. ビニールの袋の中の虫をみつける

すぐうしろに虫のはいつているビニールの袋をみつけて、T子「虫よノキャーッ！」といつてにげる。そばにいる四、五人の子どももその袋のそばによつていて、「キャーッ！」といつてにげ、またよつていつては「キャーッ！」といつてにげる。
(別にこわいわけではなく、リズムを楽しんでいるようだ)

T子はA子に「キャーッ」といつてだきつく。おりながら、A子に、「ブランコにのりましようよ」とささう。
二人でブランコの方に走ろうとすると、虫のところから「キャーッ」といつてにげてきた子とA子がぶつかり、顔をうち、いたがりブランコどころではない。

II. のぼり棒にのぼる

T子はそばにいたMに、「お水のんできましようか？」といふが、M何もいわない。が、走つてのぼり棒の方にいく。

T子もおかげしていく。M、上までのぼる。T子、となりの棒の三分の一ぐらいまでのぼる。T子おりながら「ブランコにのりましようよ」Mはそのことばにより、ブランコの方にはしる。

IV. ブランコ①——速さのきょうそう

(・T子の方が、ブランコをよくこげる。Mは、T子をおいぬこうと立つてこいだり努力するが、どうしてもT子をおいぬけない。その時のMの気持が、ことばや動作によく表われている。)

二人ともブランコにすわり、足いっぱいにうしろにひいて、T子の「よーいドン」でうきはじめる。

T子の方がいきおいよくこげる。M、それをみながら、ブランコに立ち、こぐ。でも、T子の方がいきおいがよい。

M「おそいほうがいいんだよ」
T子、速度をおとしはじめる。

M「まだはやいよ、おそいほう！」
T子は足を地面に軽くこすりながら、速度をおとしていく。Mの方がいくらかよくこげている。

M「おそいほうじやない／はやいほう！」

T子は力いつぱいこぎだす。Mも真剣な顔をして力を入れてこぐ。でもT子よりはどうしてもいきおいよくこげない。

M、下を向いて「おそいほう」という。T子、地面に足をつけて速度をおとす。M、速度をおとしながら、パッと足をつけてブランコからはなれて部屋の方へ走つていく。T子もあとにつづく。

Mは部屋に入り、水をのむ。T子も水をのみにいく。

五、ブランコ②——友だちをさそおうとする

・Mは、別の友だちに、「こころみると好反応を示す。T子をさそう。)

(・T子、M二人で友だちに呼びかけるが、だれも反応を示さない。その時、T子の気持は、ことばに表われ、Mの

興味は、ジャングルジムへとうつる。)

Mはすぐブランコにもどり、左側にすわり、右側のブランコのつなをもつていて。(T子のためにとておくつもりらしい。) T子、走つてそのブランコにすわる。こぎながら、

T子「U子ちゃんも呼んであげましょうか、Uちゃん、Uちゃん」

M「U子ちゃん！ U子ちゃん！」だれも何の反応も示さない。

T子「だれでもいいからちょつときて、U子ちゃん、こない

ーー」と、叫ぶがだれも反応を示さない。

T子「いいわよ、あんなの呼ばないでおきましょう」

T子「わたしそうぐるまわしやろうかな」という。

ブランコをこぐのをやめてMは、

「ジャングルジムやる」といつてジャングルジムの方へ走る。

T子「うんやろう」と、Mをよう。

六、おばけのまねをしておどろかす

(・たまたましたか「こうが、おばけにしている。他の人をおどろかそう」とこころみる。

二人でジャングルジムにのぼる。

T子「足だけよ」と手をはなす。Mもまねる。

T子「手しかもっちゃダメよ」と、手の力で体をささえて、足をブラブラさせる。同じようにしてMを見て、

T子「あなた、みいら」

M「T子ちゃん、おばけ」

T子「○○ちゃん、おばけ〜〜」と下を通る子にいう。

T子「写真屋さん(注1)おどかしてこよ」といつてジャングルジムをおりる。(注1)日常の記録写真を時々撮りにきて、子どもたちとは親しい写真屋さん)

T子「しゅうしゅう、しゅゆ」と手を前方におばけのまねをしながら、写真屋さんのおしりにくつつきにいく。Mもいく。

写真をうつしている最中のおじさんは、「ダメダメ、さわっちやだめ」という。

好反応のあることを期待していた二人は、調子ぬける。

Mは、つまらなさそうにスベリ台の方にかけていく。そこであそんでいる四人の男の子のグレープをみつけて、「う〜う〜しゅゆ〜〜」とおばけのまねをしてみる。男の子たちは「わあーー」と反応を示し、にげる。Mは、おいかけずにスベリ台のところから庭へ走ってきて、そこにいる子に、「T子ちゃんはどこ

「といいながら目で庭をながめ、T子の姿をおう。

T子は、写真屋さんに失望してぶらぶらと小鳥小屋のまわりをぶらついて、山にのぼる階段のところまでくる。そこに『なめくじのおはか』とかいてある紙をみつけて読んでいる。

T子「なめくじのおはかだつて」といしながら庭の方に目をやり写真屋さんの姿に目がいく。

T子「わたし、写真屋さんのところにいこうかなー」と歩きはじめる。

Mは、T子の姿を見つけて「T子ちゃん！ T子ちゃん！」と走つてくる。

M「あそこのなか（スベリ台の方）おどかしにいこう

二人で手を前にして、おばけのまねをしながら、声をだしながらおどかしにいく。

スベリ台のところにいた男の子たちは、「キャー、おばけだー！」といって上と下にげる。二人はトンネルを通つて、スベリ台の上の方までおいかけていく、またおりてくる。

Mは続けているが、T子は、興味があまりなく、タイコバンの方にぶらぶらと歩いていく。ジャリの地面に足をひきずりながら、何となくすんでいく。そばにいた写真屋さんは写真をとつているので軽くいなす。

また、同じ調子で、足をひきずりながらぶらぶらしている。

Mは、まだ、おばけをしている。

七、ブランコ③——でんしゃばっこになる

(・三回目のブランコ)

・Mは、反対向きにすわり「やまでせん」の動きになる。
Mの方からあそびに対するくふうがみられる。)

T子「Mちゃん、ブランコにのろう」
T子はブランコにのり、楽しそうに「あははは……」と笑う。

M「やまでせん！」
こぎはじめる。

となりのブランコにMは、T子と反対向きにすわりこぎだす。

T子「でんしゃばっこね、はんたいのね！ あはっはは……」
M「こっちだ！ こっちだ！」

T子のブランコだんだんはやくうごく。
二人のブランコがいきちがう。

T子こぎながらボールあそびの方をむいでいる。Mブランコをこぎながらいろいろなところをみている。ブランコをおりる。地面に足をひきずりながら鉄棒の方へかけていく。T子もブランコをおりて、鉄棒の方へいくが、先生の姿をみつけて、先生の方へいく。先生、何かいいながら、外ぐつを上ぐつとはきかえている。T子もはきかかる。Mもくつをはきかえて部屋に入る。

(記録・寺井直子)

いきいきしさ

幼児の教育 第六十九卷 第八号
八月号 ◎ 定価八〇円

子どもの友となるに、一番必要なものはいきいきしさである。必要と
いうよりも、いきいきしなくて子どもの傍にあるは罪悪である。子
どもの最も求めている生命を与える子どもの生命そのものを鈍らせずに
おかしいからである。

あなたの目、あなたの声、あなたの動作、それが常にいきいきしてい
なければならぬのは素より、あなたの感じ方、考え方、欲し方のすべ
てが、常にいきいきしているものでなければならない。どんな美しい感
情、正しい思想、強い性格でも、いきいきしさを欠いては、子どもの傍
に何の意義をも有しない。

鈍いものは死滅に近いものである。一刻一刻に子どもの心を蝕むしばみ害わ
ずにはいられない。いきいきしさの抜けた鈍い心、子どもの傍では、このくら
い存在の余地を許されないものはない。

——倉橋惣三選集第三巻（フレーベル館）より

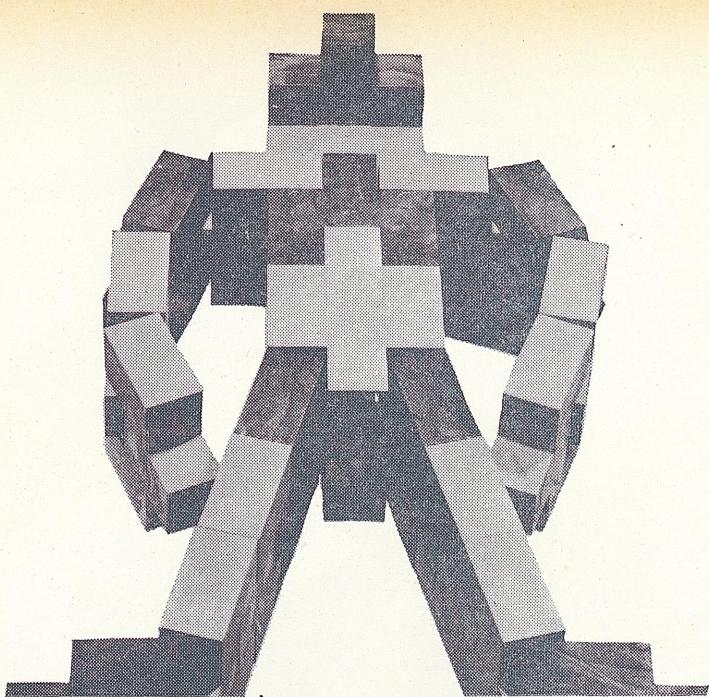
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼
発行者 津 守 真

昭和四十五年七月二十五日印刷
昭和四十五年八月一日発行

112 東京都板橋区志村一ノ一
東京都千代田区神田小川町三ノ一
印刷所 凸版印刷株式会社
発行所 日本幼稚園協会

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーべル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします



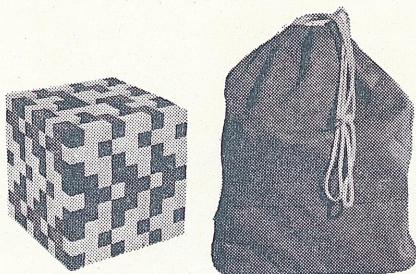
ニュータイプの積木が登場しました!!

話題の主は _____
キンダークロスブロック

キンダーブックでおなじみのフレーベル館が
育ての親です。素朴な美しい色あいと心よい
感触。デコボコの不思議なかたちから生まれ
るお城、動物、ロボット……子どものかぎ
りない夢をもって開発された新しいタイプの
積木です。

意匠登録 第232059号

- 積む、組む、はめ込むという3つの方法で、い
ままでのブロックではできなかつたいろいろな形
が作れます。
- 素朴な美しい色あい、心よい感触この遊具は
低発泡スチロール樹脂で、ブロック商品として
は、この材質は世界で初めてのものです。
- 伸縮性がなく、ピッタリ組みあわされる精巧さ
は、四季を通じて変わりません。
- 汚れたら洗剤で洗いおとしてください。材質に
影響を与えることはありません。
- 削れたり、ひびがいったりする心配のない丈夫
な遊具です。
- 個数の少ないA・Bセットもあります。



個数の多いCセットは、ナップザックで整理保管してください

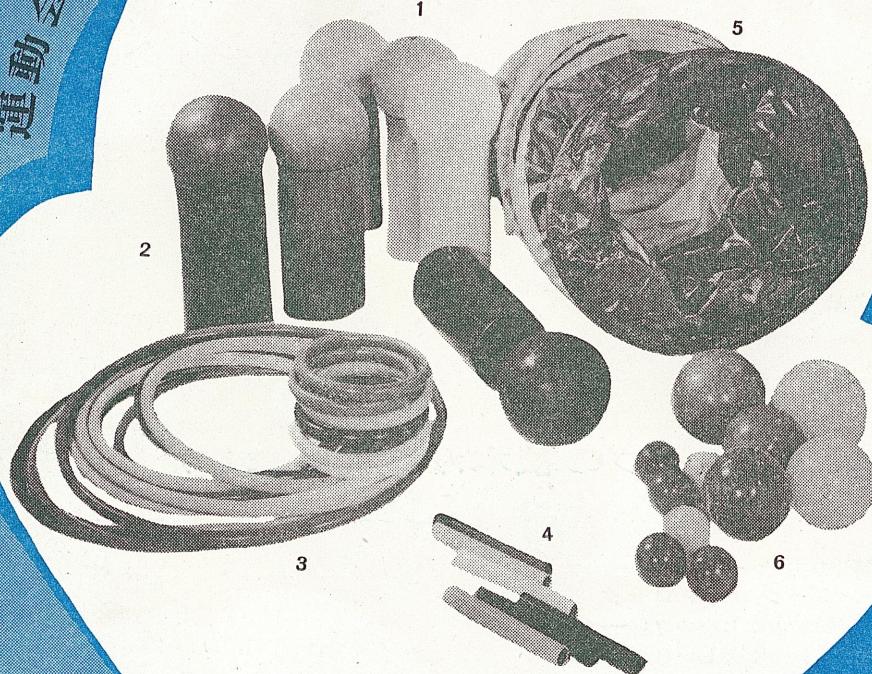
**Cセット 108個 1組
ナップザック(整理袋)つき 4,700円**

**Aセット 24個 1組 ビニールケースつき 980円
Bセット 48個 1組 ビニールケースつき 1,950円**

**キンダー
クロスブロック**
発売 株式会社 フレーベル館

運動会に

新しい プログラムを!!



楽しい フレーベル館の 運動会用品

1 キンダーパスボール

すべり止めが施しております。特殊ビニール製。直径18.5cm、黄・青・緑・桃・白・赤の6個で1セット。2,200円

2 キンダー 6色円塔

運動会では大活躍。塩化ビニール製。大塔・高さ30cm、直径16.5cm、黄・赤・青。中塔・高さ30cm 直径14cm、緑・桃・白の6本1セット。3,500円

3 キンダーカラーフープ

軽く美しい6色の輪です。塩化ビニール製。黄・赤・青・緑・白・桃が各1本6本で1セット。大=直径60cm 1,500円 中=40cm 1,200円 小=20cm 800円

4 キンダー 6色バトン

持ちやすく、丈夫なリレー用バトン。塩化ビニール製。長さ22cm、直径2.5cm、黄・赤・青・桃・緑・白の6本1セット。600円

5 キンダー カラー ボール

表面が滑らかなビニール製。赤・黄・緑の3色あります。大=直径15.2cm 220円 中=直径12.7cm 160円 小=直径7cm 50円

6 ファニートンネル

何本でもつなげます。ピアノ線と高級ビニールターポリンの特殊加工。直径56cm、全長3m。赤・青・黄・白の4色仕上げ。5,400円

*その他、魚つりセット、バスケット台、とびばこ、マット、平均台などあります。株式会社 フレーベル館